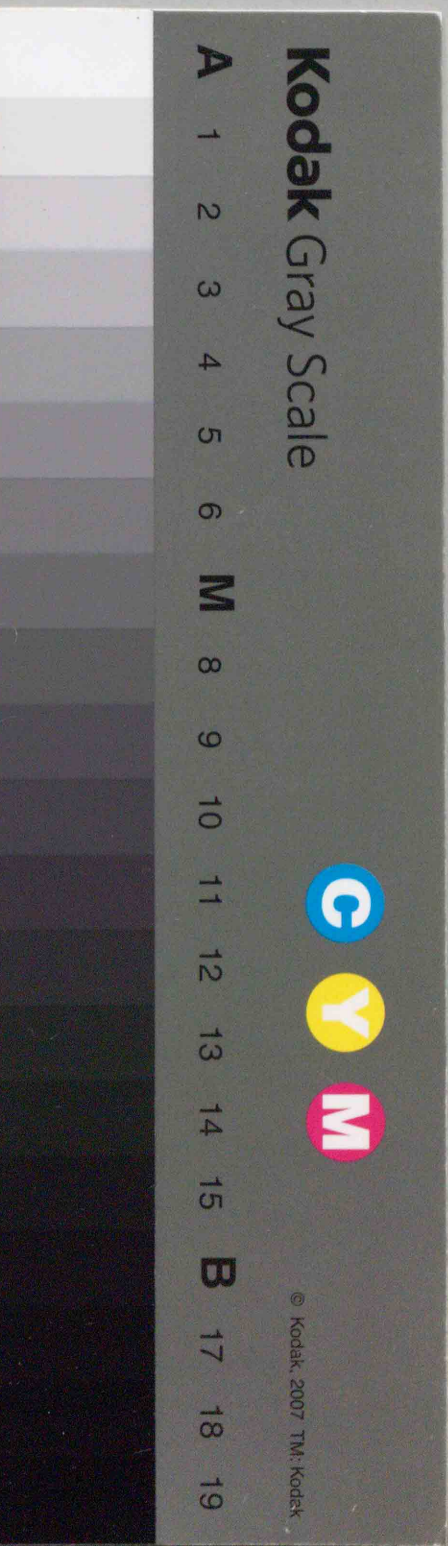
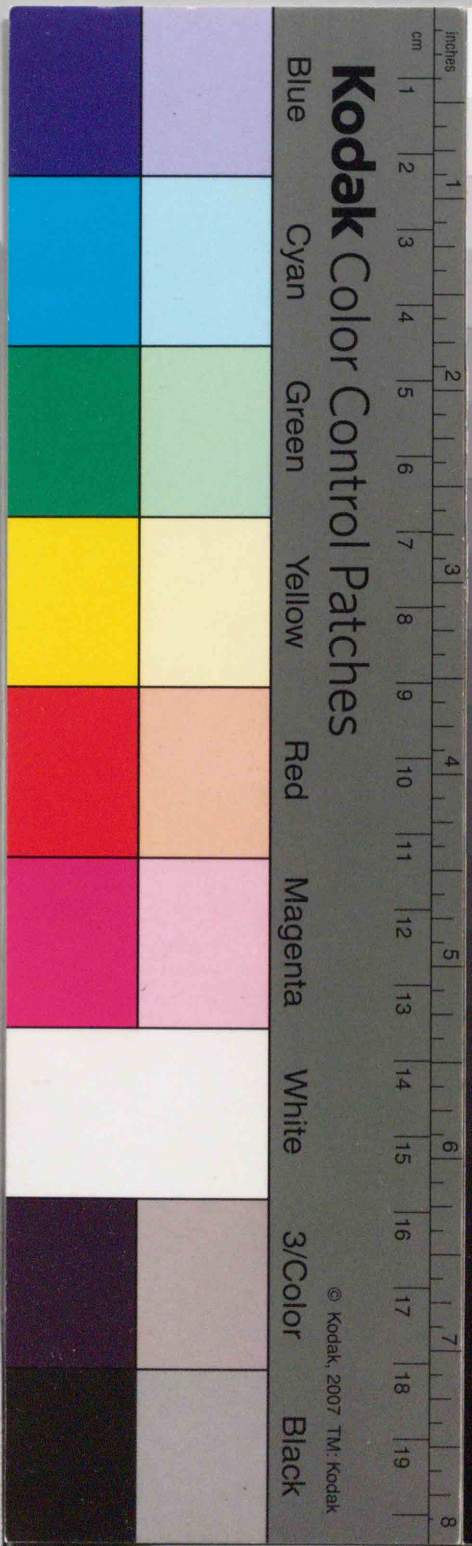


3759
Y019
資料室

訂三
新
日本
讀本

吉澤義則編
六



41435

教科書文庫

4

810

41-1931

Z000301909



3759
Y619

資 料 室



昭和六年十一月二十八日
 中學校國語漢文科用
 昭和八年七月六日
 實業學校國語科用

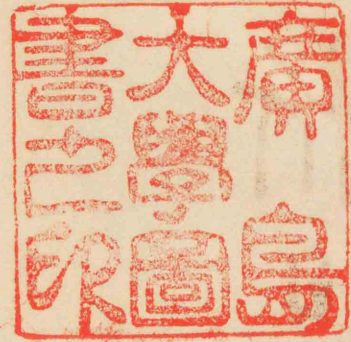
文
部
省
檢
定
濟

修
文
館
發
行



（畔池澤猿貝奈） 雪 の 都 古

（第十九課參照）



卷六 目次

一 尊皇の精神
二 日輪頌
三 君民一家
四 大御寶
五 心と言葉
六 西郷隆盛に與ふ
七 知己難
八 浮島が原の對面

芳賀矢一 一
正富汪洋 九
深作安文 二三
(玉 櫻) 二八
和辻哲郎 三一
山縣有朋 三六
徳富蘇峰 三三
(義經記) 三七

目次

九 空ゆく雁

(會我物語) 四三

一〇 自然の寂光

吉江喬松 四九

一一 神國の首都

小泉八雲 五五

一二 雅文抄

一えぞの咄

(花月草紙) 六二

二 黄金を好むこと

(花月草紙) 六三

三 書讀むことのたとへ

(玉勝間) 六四

四 縣居の大人の御さとし言

(玉勝間) 六四

五 壬子試筆の詞

(駿臺雜話) 六六

一三 諺

藤井乙男 七〇

一四 川柳點

金子元臣 七九

一五 春の潮

(諸家) 八五

一六 民謡

島木赤彦 八六

一七 折焚く柴の記の序

(折焚く柴の記) 九五

一八 徒然草抄

一 神無月の頃

九八

二 仁和寺にある法師

九八

三 是も仁和寺の法師

九九

四 弓射る事を習ふに

一〇一

五 高名の木登り

一〇二

六 相模守時頼の母

一〇三

七 丹波に出雲といふ所あり

一〇四

一九 雪前雪後

幸田露伴 一〇六

二〇	土
二一	千曲川旅情の歌
二二	夜叉王
二三	俊寛
二四	忠度都落
二五	文學と氣品
二六	人の道
二七	明淨直
二八	國民の抱負

長塚節	一一一
島崎藤村	一一七
岡本綺堂	一二一
菊池寛	一三三
(平家物語)	一四三
芳賀矢一	一四六
(益軒十訓)	一五三
五十嵐力	一五四
大西祝	一六三

終



三訂 新日本讀本 卷六

芳賀矢一

福井市の人、國學者、文學博士、前國學院大學長、昭和二年、卒年六十一。

皮相の見

蔽うた

一 尊皇の精神

芳賀 矢一

我が國民が皇室に對して厚い忠誠の念を持つてゐることは、上古以來少しも變らぬ。武家時代に、大權の下に移つたのを見て、全く尊皇心が無くなつた時代と思ふのは皮相の見に過ぎぬ。外人などは往々さういふことを言ふ。これは自分等の國柄から考へるからである。權臣が寵恩に慣れて專横な政をしたり、將軍が兵馬の權を握つたりした事實は、國史の上では勿論面白くない現象に相違ない。併し、其の間は頼三樹三郎が歌つたやうに、天邊大月缺、光明の時代で、言はば浮雲が天日を蔽うたので

ある。決して本来の日が無くなつたのではない、天下の人は皆天日の空にあることを知つて居つたのである。兵馬の權を掌握した公方様でも、やはり天皇の臣下で、天皇から爵位を戴いて居ることを知つて居つた、天皇の御代理として國民の上に立つて居ると信じて居つたのである。天皇が政治からお離れになつても、天皇の御威光は少しも衰へては居らぬ、却つて益々神聖なものとして見上げて、愈々神と同様に尊崇するやうになつた。公方様を見ても何とも思はぬが、九重雲深くまします禁裏様を拜めば、目が潰れると信じて居つた。藤原氏の攝政關白時代でも同様に、幼冲の天子を擁立し奉りて、攝關が政權を恣にしても、皇室の尊嚴なることは少しも變らぬ。攝關時代も、武家時代も、そこに何等の差別は無い。攝政や、關白や、將軍や、彼等自身も亦政權を握つては居るが、皇室を尊敬し奉るの念を失はず、朝廷の恩寵を

幼冲

チャンブレン
明治初年我が國に渡
來した英人

磅 磚
藤田東湖
名は彪、水戸の藩士
齊昭侯の儒臣、安政
二年(三五)歿、年五十

「我が國民の尊皇心」

笠に著て、下に號令したのである。西洋人は國史を見ても其の皮相を見るのみであるから、武家時代は國民が全く朝廷を忘れた時代かと早合點する。久しく日本に居て、日本文學に通曉して居るチャンブレン氏でさへ、やはりさう信じて居る。それで徳川以來起つて來た水戸の尊皇論、國學者の愛國論を以て、一旦廢れたものの復興のやうに考へ、今の教育は全くミカド崇拜を教へるために爲政者が工夫したもののやうに論じて居る。焉ぞ知らん、我が尊皇心は、攝關時代も、武家時代も、一貫して國民の間に磅磚して居つた事を。そは藤田東湖の正氣の歌に、

神州誰君臨、萬古仰天皇、皇風洽六合、
明德侔太陽、不世無汚隆、正氣時放光、

といった通り、歴代時々あらはれて居る。民主的王國たる英國の國民には、どうしても日本の尊皇心は了解が出来かねるので

ある。

我が國文學を見れば、常にこの精神が発揮せられて居る。見よ見よ、上代の祝詞は祭祀の文學にして、即ちマツリゴトの詞である。柿本人麿の長歌は更に之を抒情歌に應用して、奈良時代の雄大な長歌を成し得たもので、常に神代より説き起し、山川もよりて仕ふる大君と歌つたのである。和歌を基礎として起つた平安時代の物語日記は、つまり朝廷のみやびを寫し、其の儀禮を記載したものである。紫式部にしても、清少納言にしても、低い身柄でありながら、身は月卿雲客と伍して、至尊に近く侍つた名譽を筆述したのである。之を無上のほまれと思惟して、宮中の見聞を記載したのである。然るべき人の女などは、禁中に宮仕されるがよいといひ、宮中の御模様を見ては、常に有難涙のこぼれることを敘して居る。枕草子は全部が其の時代の懷舊談

祝詞

柿本人麿

持統・文武兩帝に仕へた歌人。

山川もよりて仕ふる

山川もよりて仕ふる神の御代かも、(柿本人麿)

紫式部

藤原宣孝の妻、上東門院に仕ふ、源氏物語の作者、歿年不詳。

清少納言

清原元輔の女、一條天皇の皇后藤原定子に仕ふ、枕草子の作者、歿年不詳。

枕草子

清少納言の隨筆。

延喜時代

醍醐天皇の御宇(天曆一)天三の稱、延喜五年(天五)紀貫之等が古今集を撰した。

平家物語

十二卷、平家の治亂を録したもので、信濃前司行長の作といはれてゐる。

御門の御位

徒然草の一節、竹の園生

である。これ等の書物の讀者も亦、之によつて宮中の模様を餘所ながら覗ひ知ることを喜んで、面白く讀んだのである。延喜時代に和歌の勅撰集が始まつて以來、歌人は勅撰集に其の詠の入るのを無上の名譽と感じた。歌と朝廷とは茲に全然離るべからざるものとなつた。太古から存在して、形式も言語も純日本である所が、皇室と同じである。敷島の道と稱し、葦原の道の名のあつたのも是が爲である。近世の慷慨家に歌人が多く、歌人が常に尊皇家であつた理由も、これで理解せられる。平家物語などの軍記物語、それの一轉して劇化せられた謠曲の類が常に神祇を尊び、皇室を崇めることはいふまでも無い。概して厭世主義のはびこつたといふ鎌倉・吉野時代の文學にも、尊皇の思想は絶えず繰り返されて居る。御門の御位はいとも畏し、竹の園生の末葉まで人間の種なら

ぞ……なき
衰へたる末の世
徒然草の一節
こそ……なれ

有職故實

何事も古き云々
徒然草の一節

ぬぞやんごとなき。
衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ
世づかずめでたきものなれ。
などといつてある。かく朝廷を崇める思想が即ち有職故實の
學問の起つた所以である。「何事も古き世のみぞ慕はしき」と、
云ふので、平安朝の典雅なみやびをしのぶ當時の時代精神を成
し、随つて所謂擬古の文體までも起つたのである。擬古文は徳
川時代の國學者が作り始めたのでなく、已に鎌倉時代に起つて
居る。徳川時代の戯曲・小説は多く武士道を主として居るので、
朝廷を歌はないが、直接に朝廷をおとしたものは一つとして無
い。況や徳川時代には國學者の歌文に於ても、漢學者の詩文に
於ても、尊皇を歌つたものは、時代の切迫と共に益、多くなつて來
た。之を要するに、太古から今日まで、何時の世、如何なる文學を

「國文學に現れた尊
皇の精神」

見ても、皇室に對して不平がましい言は半句として無い。國民
が朝廷を忘れたやうに見える時代はあつても、決して忘れたの
ではない、衷心からの尊敬心は毫も渝^ひらなかつた。此の國土は
即ち皇室と共に存在する。諾冊の兩尊國土を産ませられて、次
に天照大神を生まれられたといふ上代思想は、嚴として遺つて
居るのである。

西洋では王室と國土との關係が密接でない。外國の王族は
二三百年の昔に遡れば、地方の豪族位なのが多い。それ故祖國
を護れといふ事を教へる。且、大抵の國歌は、國民の自由を歌ひ、
國家の繁榮を歌ふ事が主になつて居る。米國のはもとより、英
吉利のルールブリタニヤでも、佛蘭西のマルセイユでも皆それ
である。よし國王を歌ふにしても、神よ國王に幸あれと、國王以
外にゴツドを考へてゐる。我が國の君が代は唯簡單に御代長

「國歌に現れた尊皇の精神」

久を祝してある、それが即ち國歌である。皇室の繁榮は即ち國家の繁茂である。而して又臣民の繁榮である。之を區別して歌ふ必要はない。

諸外國は最初から皇室と國土とが離れて居る國風である。政體が幾變遷し、主權者が幾たび新にならうとも、國家は依然として存續するであらう。之に反して、我が日本は皇室と國土は切つても切られぬやうに結び付いて居る。皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であることを知ると同時に、皇室なくして日本國もなく、日本人も存在し得られぬといふことを深く念はねばならぬ。

皇室の御繁榮は國家の繁榮である」

二 日 輪 頌

正 富 汪 洋

わが國を表象するは

世界を遍く照らす

燦然たる太陽

わが國民の理想は

高照りわたる

唯一無比の太陽

國の名は日本

男子の稱は日子ひこ

女子の稱は日女。

日の丸の國旗は

そもく、世界に

何を意味する。

國民よ、みな

日の威徳と日の公明と

日の徳澤と日の愛情とを保て。

日は利己的でない、

日本は利己的でない、

そこに大同化の偉力がある。

日は輝いて萬物を輝かす、

日本の國民は輝いて

普く他を輝かす。

我等は他動的、

我等の使命は

世界の幸福増進。

我はいふ、我等の祖先の

常に懷いた大理想を

掲げよ、行へよ、太陽の子と。

三 君民一家

深作安文

深作安文
茨城縣の人、東京帝
國大學教授、文學博
士。

わが國では、皇室は國民全體の大宗家にましく、人民はその末流を辱うしてゐるので、皇室は一般人民の尊崇の焦點となり、以て今日に及んだのであつて、これを君民一家といふのであります。

さればわが國では、君主と人民との關係は、君臣たると同時に父子であつて、御歴代の天皇の、いづれも深く人民を愛撫し給うたことは、恰も慈母の赤子に於けるが如く、人民が君主を仰慕し奉ることは、なほ赤子の慈母に於けるが如くであります。雄略天皇の御遺詔の中に、「義ハ乃チ君臣情ハ父子ヲ兼ヌ。」とありますが、至懇至到な聖旨のほど、實に感激に堪へない次第であります。けれどもかやうなことは、獨り雄略天皇ばかりでなく、列聖

給うた

雄略天皇

第二十一代

御遺詔

日本書紀第十四卷にある。

堪へ。

大正天皇
第二百十三代

の御志であらせられたことと拜察されます。大正天皇の御即位禮の勅語の中に、

爾臣民世々相繼キ、忠實、公ニ奉ス。義ハ則チ君臣ニシテ、情ハ猶ホ父子ノコトク、以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ。

と宣はせられたのに依つても知るべきであります。神代の古より、人民に大御寶蒼生、天の益人（きびびと）などの名稱があり、民族が古來殆ど理想的の統一を保ち、いまだ一たびも分裂を生ずることのなかつたのは、全くこれが爲であります。

「君臣即父子。」これ、わが國體を研究するもの、どうしても輕輕に看過すまじき事實であります。故に治者、被治者といふやうな形式的名詞では、わが君臣の關係をいひ表すことができず、父子といふ自然的名詞で、初めて能くこれをいひ表すことができるのであります。されば、君臣の分は初めから明らかであつ

「君民一家の思想」

下剋上

陰翳

「忠と孝と相一致す」

て、臣に下剋上の行爲なく、君に暴逆の御ふるまひがないのであります。皇室の御仁慈は子に對する父の至情に基き、臣民の忠誠は父に對する子の至情に發し、至情を以て至情に對するので、上下透徹して、少しの陰翳をも留めないであります。すでに君民一家であり、また君臣即父子であります。こゝに於てか、忠と孝とは左の意義に於て相一致するのであります。

一 わが國では、國と家との差は、單に規模の大小に過ぎないので、國を縮小すれば家となり、家を擴大すれば國となるのであります。否、國はやがて大なる家なのであります。故に、君主としての天皇に對し奉る忠は、大家長としての天皇に對し奉る孝であります。

二 我々の歴代の祖先は、列聖に對して忠を盡くし奉つたものでありますから、今日我々が天皇陛下に對して忠を盡くし奉る

のは、祖先の志を成す所以で、取りも直さず、祖先に對する孝であります。即ち忠孝兩全であるのであります。

三 孝は、子たるものが誠を致してその親に仕へることをいひ、忠は臣たるものが同じく誠を致してその君に仕へ奉るといふのであります。されば、誠たる點は兩者全く同一で、親に對する孝を以て君に仕へ奉れば則ち忠となり、君に對し奉る忠を以て親に仕へれば則ち孝となるのであります。

四 人の子たるものが、家にあつて誠を以て親に仕へれば孝となり、國にあつて誠を以て君に仕へれば忠となります。即ち我には單に一誠あるのみで、たゞその所を異にし、範圍を異にするので、孝となり忠となるのであります。

世界いづれの所にも家のないといふことはなく、いづれの所にも國のないといふことはありません。家ある所、孝を以て子

たるものの道としないのはなく、國ある所、また忠を以て臣たるものの道としないのはありません。それ故、忠孝は人といふ人に通ずる大道であつて、決してわが民族にのみ存するものではないありません。たゞ他國にあつては、忠と孝とは分離して存在し、わが國に於けるやうに、渾然として合一しないのであります。特に支那では、忠よりは孝を重んずるばかりでなく、その忠は「君臣義あり」といつて、よほど形式的のものであります。臣たるものが、その君を諫めて若し聽かれなかつたならば、去つてよい場合があるのであります。然るに我が國では、孝よりも忠を重んじ、よしや君は君たらずとも、臣は臣たらねばならないのであります。故元田東野翁の

人臣の道進んで喜ばず、退いて怨みず、貴なく、賤なく、大なく、小なく、所在當に忠を致すべし。

元田東野翁

名は永平、熊本縣の人、前樞密院顧問官、明治二十三年歿、年七十四。

といはれたのは、即ちこれであります。

要するに、わが國の忠は孝に一致する忠であり、わが國の孝は忠に一致する孝であります。それ故、嚴密にいへば、わが國に於ける忠と孝とは、支那の忠孝といふ文字では、十分にこれをいひ表すことができないのであります。これ、わが國の忠と孝とが、他國のそれ等と到底同一視することのできない所以であります。實に忠孝一致、若しくは忠孝一本は、わが國民道德の特色中の特色であります。

(國民道德要義)

四大御寶

一寶

皇美麻命
瓊々杵尊

寶といふ言の始めは、天照大御神の皇美麻命に天下しろしめせと御言よさして、八咫鏡と叢雲劍とを御璽の神寶として賜へる處に見えたるが、この時よりして天の下を治め給へば、青人草をも大御神の賜へる物と愛く思ほす意をもて、大御寶とは申すぞや。實にも天皇のまた比類なき御寶は、天下の大御民にぞありける。但し、大御寶とは農人のみにあらず、そは率土の濱、國臣にあらずといふ事なしといふ如く、天皇の御正朔を奉ずる人の限り、謂はゆる士農工商までに渡る稱なる事、國史に王民兆民黔首公民百姓萬民などを、オホミタカラと訓めるにて知るべし。然るに農民をうち任せて云ふ言の如くなれるは、謂はゆる四民

率土の濱

正朔

う
う
う
う

なりなむ

正親町天皇
第百六代
ぞ依れりける

の中に殊に多く、かつ、上なく大切なる穀物を作りうる業に勞きて、これにて上をも養へばなり。されば、その大御寶とあらむ人は、常にその大御寶なる由緒を思ひ、また大御神の天皇につけ奉り給へる事の本を思ひ、その御治めを辱み奉り、各、それぐ家業を好きて怠らず勤むべき事勿論なり。そは士たらむ人は、士の業を好き、農たる人は、農業を好き、工商またそれぞれにその業をすくより、各、その業に上手となるは、さる物にて、さしもその道に至り深くなりなむ事は、神代の道に習ふ心ぞ本なりける。

二 織田信長

信長公の朝廷を尊崇し、世のおとろへを興復せられしは、専ら正親町天皇の大詔にぞ依れりける。さて、この時は前にいへる如く、天下逆亂の極みなりしかば、皇居も荒れはて、有るか無きかの御有様なりしに、信長公先づ大いに皇居を造營し給ひ、亂世の

采田 天武天皇
第四十代
式年遷宮
天武朝の創定、信長の寄進によつて天正十三年(一六五五)に皇大神宮の式年遷宮があつた。
男山八幡宮 石清水八幡宮、山城國綾喜郡男山に鎮座。八幡大神、大帯姫命を祀る。
武田勝頼 武田信玄の第二子、信長・家康のために攻められ、天目山にて天正十年(一六三二)歿年三十七。
熱田宮 日本武尊及び草薙劍を祀る。官幣大社。
かへりまうし 節會
いみじ
玉 繚
一卷、平田篤胤の神拜に關する心得を記述した書。
平田篤胤 出羽の人、國學者。天保十四年(一八四三)歿年六十八。

中ながら、金子を都民にかして、その息を經費にそなへられ、廷臣等も窮迫して粥を食し給ひし程なりしに、この公、その采田を検して、人に賣る者は價を償うてそのもとにかへし、又二條の城趾を賜ひしにも、自らは住せられず、その處に宮室を營みて、皇太子に獻られ、尙又伊勢の兩宮は天武天皇よりこの方、廿年に一度づつ造進せらるゝ御事なるに、兵亂の爲に皇室と共に數百年衰廢せしを、信長公まうしこひて、男山の八幡宮と共に造營せられ、又武田勝頼を亡ぼして歸陣せらるゝ時に、熱田宮にかへりまうしして、その宮を修造せられ、天正六年正月、始めて節會を行はれし時も、朝儀廢絶せしを、この公、廢典を起してとり行ひ給ひしなど、人みな感歎せし由なり。すべてこの公は小義に拘はらず、もはら大義をつとめて、まづ天下に皇室の尊きを知らしめ給へり。いともしみじきいさをしならずや。(卷二) (玉 繚)

和辻哲郎

兵庫縣の人、明治二十三年生、哲學者、京都帝國大學教授。

五 心 と 言 葉

和 辻 哲 郎

觸れ合はう。
我 執

葛 藤
「言葉の不完全が産みだす葛藤」

心と心とを觸れあはせるには、言葉だけに頼ることは出來ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔たりが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて來る。思ふことを單純に現したつもりでも、相手がまるで異つた方向に刺戟を受けることは珍らしくない。觸れ合はうとする心は、いつまでも言葉の奥にちゞこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が産みだすこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。しかし、この不完全な言葉を使つても、心が何のこたはりもななくすなほに向うへ通ずることもある。時には、その言葉の必要

さへない。それが言葉の上の詳しい説明や了解を必要とするはずの場合においてもさうなのである。

だから、言葉によつて心を通ずることは出来ぬといひきるわけにはゆかない。しかしまた、言葉で説明しさをすれば、心は通ずるものだといひきること出来ぬ。

心を通ずるのは、心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服させるわけにはゆかない。

例へば、或人の行爲に對して、非難の心持を経験するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは確にいゝことである。しかし、その行爲の正しくない所以をいかに明白に説明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられてゆく間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立

反撥

場から相手の行爲を不正と判断しても、相手は相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く説き破つたところで、相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうなぐあひには決してゆくものではない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することは出来ない。彼が道徳的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に頼つてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押し詰められても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて来るはずはないのである。むしろ、彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服欲などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙に強い刺戟を彼に與へるのであ

「頭の論理と心の論理」

燃え

(燃ゆ)

「相手の心に觸れる言葉」

る。

たとひ、忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、またその忠告が非常に正しいことであるとしても、相手があるならば、忠告者の心は、終に相手の心に觸れることが出来な
いであらう。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを説明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

或心の状態を現す言葉は、複雑な組織を土臺として現れて來る。だから同一の言葉も、それを使ふ人の人格の異なるに隨つて、それ／＼に異なつた色調や倍音を伴ふ。言葉を通して、その背後にある人格がにじみ出し、ひゞき出すのである。

心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集

倍音

「心を現す言葉の妙味」

假託

キリス

ユダヤの人、キリス
ト教の祖(西紀三)及
年三十四

「貴いのは言葉の奥にひそむ心」

積によつては、些かも深められるものでない。たゞ正直に、その人の築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虚飾をも許さない。同じ言葉を使つて、同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一であるやうに、なや輒くは同一であることが出来ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にも、その人の言葉の内容に、或限界を與へる。キリストと同じ眞理を語ることも、もしくはそれ以上に深い眞理を語ることは、二十世紀の今日では極めて容易であると考へてゐる人が、我々の眼前にいかにも多いことであらう。しかしまだ何人も、キリストの如き力と愛とをその言葉からひゞき出させたものはない。貴いのは言葉でなくて、言葉の奥にひそむ心である。

(偶像再興)

山縣有朋
山口縣の人、大勳位
公爵、元帥、陸軍大將、
大正十二年歿、年八
十六。

六 西郷隆盛に與ふ

山縣 有朋

故山に歸養
明治六年。
警咳に接す
舊雨の感

山縣有朋、頓首再拜、謹んで書を西郷隆盛君の幕下に呈す。有朋君と相識る茲に年あり。君の心事を知るまた甚だ深し。曩に君の故山に歸養せしより、久しくその警咳に接する事を得ざりしかど、舊雨の感、豈一日も有朋の懷に往來せざらんや。料らざりき、一旦滄桑の變に遭ひて、君と旗鼓の間に相見るに至らんとは。

滄桑の變
滄海變ジテ桑田トナ
ルヲ見ル神仙傳。
料らざりき……とは
亡狀滅亡

君が歸郷の後、世の鹿兒島士族の亡狀を議するもの、皆いはく、「西郷實に其の巨魁たり、謀主たり」と。

なせりき

然れども、有朋は、ひとりこれを斥けて、然らずとなせりき。然るに今かくの如し。嗚呼、また何をかいはん、然れどもひそかに思ふに、事のこゝに至れるは、蓋し勢の止む

名なき軍

佐賀の賊

明治七年江藤新平叛
熊本・山口の叛徒
す。
明治九年、熊本に敬
神黨起り、次いで前
原一誠等山口に反す。

韜晦

奇貨

讒誣

蒼生

を得ざるに出でしものにて、君の素志にてはあらざりしならん。若し君にして初めより眞に異圖を懷きしならば、何ぞかゝる名なき軍をかゝる機を失へる時に起さん。薩軍の今公布するところを見るに、罪を一二の官吏に問はんとするに過ぎず。これ果して舉兵の名を得たりといふべきか。佐賀の賊まづ誅せられ、熊本・山口の叛徒次いで敗れ、今や天下の士民漸くその自省の志を立てんとす。しかして、薩軍突如としてこゝに兵を擧ぐ。これ果して舉兵の機を得たりといふべきか。君の明識なる、豈これを知らざることあらんや。

説者またいはく、天下不良の徒は、西郷の山林に韜晦したるを奇貨とし、これによりて功名を萬一に僥倖せんとする念を懷き、その辭を巧にして、ひたすら朝廷の政務を讒誣し、西郷に説くに、「君出でずんば、蒼生をいかにせん、君にして義兵を擧げなば、天

洞察
浸潤
衆口金を燦かす

下靡然としてこれに向はん。」との旨を以てせしならん。西郷の卓識なる、その讒誣たるを洞察するに難からざりしなるべしと雖も、その浸潤のいたす所、實に衆口金を燦かす勢ありて、知らず識らず、遂に事を擧ぐるに至りしならん。」と。聞く者、皆これを然りとす。しかれども、有朋ひとりこれを斥けて然らずとなす。何となれば、若し君にしてまことにその志ありしならば、單騎輦下に來りて從容として利害のあるところを上言するに於いて、何の妨げもあらざるべければなり。



西郷隆盛

思ふに、君が多年育成せし壯士輩は、はじめより、時勢の真相をも知り、人倫の大道を履踐する才識をも備へたる者なるべけれど、かの不良の徒の教唆により、或はその一身の不遇によりて、その不平の念を高め、遂に一轉して悲憤の念を懷き、再轉して叛亂の心を生ずるに至りしならん。しかしてその名を問へば、則ちいはく、「西郷の爲にするなり。」と。情勢既にこゝに至る。君が

輩下

教唆

ど、かの不良の徒の教唆により、或はその一身の不遇によりて、その不平の念を高め、遂に一轉して悲憤の念を懷き、再轉して叛亂の心を生ずるに至りしならん。しかしてその名を問へば、則ちいはく、「西郷の爲にするなり。」と。情勢既にこゝに至る。君が

西郷隆盛筆
盡人事、俟天命
應長谷場君需
南洲書

冬人多作てる

西郷隆盛筆

平生故舊に篤き情は、空しくこれを看過して、ひとり餘生を完うするに忍びざりしならん。されば君の志は、はじめより生命を以て、壯士輩に與へんと期せしに外ならざりしならん。君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの、故なき

忍びざりしならん

にあらず。嗚呼、君の心事まことに悲しからずや。有朋ことに君を知る深きが故に、君のために悲しむ心また切なり。然れども事既にこゝに至る。これをいふとも、何の益かあらん。顧みれば、交戦以來既に數月を過ぐ。兩軍の死傷、日々幾百なるかを知らず。朋友相殺し、骨肉相食み、人情の忍ぶべからざるを忍びぬ。かゝる戦の如きは、古來例なきところなり。しかして戦士の心を問へば、共に寸毫の恨あるにあらず。たゞ王師はその職務のために、薩軍はその帥西郷のために戦ふといふに過ぎず。それ一國の壯士を率ゐて、よく天下の大軍に抗し、劇戦數旬、百敗撓まざるもの、既に君が威名の實を天下に示すに足れり。而して今や君の麾下の勇將概ね死傷し、その軍威日々に衰へんとす。薩軍の遂に志を成すこと能はざるは、既に明らかなるにあらずや。君、更に何の望むところありてか、徒に守戦を事とせんとは

師帥

ありてか……する

する。若し人の、西郷は事の成らざるを知れど、暫くその餘生を永くせんがために、敢て百千の死傷を兩軍より出だすを辭せざるなり。」といふ者あらば、有朋それに向ひて何とか答へん。願はくば君早くみづから圖りて、一はこの擧の君が素志にあらざるを明らかにし、一は兩軍の死傷を明日に救ふ計をなせ。嗚呼、天下の君を議する、實に極まれりといふべし。國憲の存するところ、おのづから然らざるを得ずといへども、思ふに、君の心事を知るもの、ひとり有朋のみにあらざらん。然らば何ぞ公論の他年にさだまるなきを憂へん。故舊の情、有朋切にこれを君に冀望せざるを得ず。書に對して涕淚雨のごとく、いはんと欲することをも悉くすあたはず。君、すこしく有朋が情懷の苦を察せよ。

德富蘇峰

名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年(三十三)生、評論家、貴族院議員。

七知己 難

德富蘇峰

仲達

支那魏の名將、司馬懿の字。

祁山・渭水

共に支那甘肅省鞏昌府。

孔明

支那蜀の丞相、諸葛亮の字。

玄德

支那蜀の昭烈帝、劉備の字。

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべきなり。かの仲達が祁山・渭水の空營を按じて、「天下の奇才なり。」と叫びたるを見れば、かの孔明のためにはよき知己なりしにあらざるや。孔明は實に二箇の知己をもてり、敵にては仲達、身方にては玄德。人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、著すれば情を生じ、久しければ情を生じ、屢すれば情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友も亦類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらん。少しく心をとめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人

は得らるゝにあらざるや。

二人の知己を得るは難し

君ならで

紀友則の歌(古今集)

知己に至りては然らず。天下百千の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞ。われよりすればかれに知らるゝなり。かれよりすれば、われ知るなり。君ならでたれにか見せん梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

鍾子期・伯牙
共に支那戰國時代初期の人
荆軻・高漸離
共に支那戰國時代末期の人

これ實に知己に對する情なり。知己實に難し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して伯牙絃を絶ち、荆軻死して高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものなり。

楊巨源
中唐の詩人。

楊巨源の詩にいはく、

詩家清景在新春。

柳嫩鵝黃色未勻。

玄間

「語るを待たずして知る」

東坡

蘇軾の號、宋の文學者、建中靖國元年(西曆一一二二)歿、年六十六

子由 蘇轍の字、軾の弟文學者

若待上林花似錦 出門皆是看花人

と。龍を見て龍となす、難きに非ず。一寸の蛇を見て、早くもその雲を起し霧を吐き、茫洋として玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、その未だ發達せざる時に於て、他日の發達を卜するにあり。その見たる嘻笑怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得する事の難きにあり。人はその半身上は祕密なり。知己はよく鍵なくしてこの祕密を知る。固より他のわれに語るを待たざるなり。語るを待ちてこれを知るが如き、これ豈知己ならんや。

かくて、知己の感は又兄弟の間にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて、重辟に處せられんとするを聞き、その弟子由に書を贈りていはく、

是處青山可埋骨 他年夜雨獨傷神

未了因

生面

「知己の交感」

賈生

支那漢代洛陽の人、文章家。

屈原

支那楚の人、名は平、文章家、(西曆前二九五年)歿、年六十三。

孟軻

世に孟子といふ、周の亞聖、赧王の二十六年(西曆前二九九年)歿、年八十四。

孔子

魯の人、名は丘、周の敬王四十二年(西曆紀元前四七九年)歿、年七十三。

周公

名は旦、周の文王の子、(西曆紀元前一一五〇—一一二五)歿、年五十六。

キケロ

ローマの文學者、(西曆紀元前二〇六—一四八)歿、年五十六。

スキピオ

ローマの勇將、(西曆紀元前三五—一二)歿、年五十六。

與君世々爲兄弟 又結來生未了因

と。その同胞の情、元より篤し。況や、これに重ぬるに、雙々知己の恩愛を以てするに於てをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にしてかくの如き知己の感あるもの、古往今來それいくばくぞ。

知己は又、敵人にあるのみならず、生面の人にもあり、或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、處を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて、吾復夢に周公を見ず。」といひしが如き、その言の懇到深切、感ずべきにあらずや。キケロ曰く、「余に對しては、スキピオなほ生けるなり。しかして以て常に生くべし。」と。嗚呼、宇宙茫茫、たゞ知己ありて以て繋ぐところあり。知己なくば人生は荒野のみ、荆棘のみ。

悔い
（悔い）
魏徵
唐の太宗の侍中。
人生感意氣
唐詩選にある。

「知己を持てるは人
生の清福」

人は知己の爲にその憂苦患難を共にするを厭はず。甚しきは、其の一身を投じて知己のために犠牲となるものあり。彼等は漫に犠牲となるにあらず、實に知己の爲に犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。況や區々たる浮世の名利をや。魏徵が「人生感意氣、功名誰復論」といふ句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるものなり。
人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中、知己を持てるは最も清福なり。しかしてその兄弟姉妹、父母の中に知己を持てるは、最も大なる清福なり。かの東坡、子由のごとく、風雨の夜、兄弟床をならべて千古の懷を敘するを得ば、天下またこれに優る清福なからん。

（靜思餘錄）

卷末附圖參照

九郎御曹司
源義經。
浮島が原
駿河國駿東郡愛鷹山の麓、須戸沼附近の原野。
兵衛佐殿
源頼朝。
休められける

鎌倉殿
頼朝を指す。

八 浮島が原の對面

九郎御曹司ごうし浮島が原に著き給ひ、兵衛佐殿すけのぶの陣の前、三町ばかり引き退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、爰に白旗白印にて、清げなる武者五六十騎ばかり見えたるは誰なるらん覺束なし。信濃の人々は木曾に従ひて留まりぬ。甲斐の殿原は二陣なり。いかなる人ぞ。假名實名けみやじりみを尋ねて參れ。」とて、堀の彌太郎を御使にて遣さる。彌太郎、家の子郎等數多引き具して參る。
間をへだてて、彌太郎一騎すゝみ出で申しけるは、「こゝに白じるしにておはし候ふは誰人にて渡らせ給ふぞ。假名實名けみやじりみに承り候へと、鎌倉殿のおほせにて候。」と申しければ、其の中に、二十四五ばかりなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫

裾濃の鎧の裾金物のうちたるを著、白星の五枚兜に、鍬形打ちて猪頸に著、大中黒の矢おひ、滋籐の弓持ちて、黒き馬の逞しきに乗るが、歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿も知らしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年、奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の由承り、夜を日につぎて馳せ参じて候。見参に入れて給ひ候へ。」と仰せられければ、堀の彌太郎、さては御兄弟にてまし、けりと、馬より飛んで下り、御曹司の乳母子、佐藤三郎を呼び出して色代あり。彌太郎一町ばかり馬を曳かせけり。

佐藤三郎
繼信、義經の臣、
色代

かくて佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さらば是へおはしまし候へ。見参せん。」とのたまへば、彌太郎やがて参り、御曹司に此の由を申す。御曹司大きに悦び、急ぎ参り給

連れてぞ……い、

ふ。佐藤三郎、同四郎伊勢の三郎、これら三騎召し連れてぞ参らる。

佐殿御陣と申すは、大幕百八十張ひきたりければ、そのうちは、八箇國の大名、小名並み居たり。各、敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には、疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司冑を脱ぎて、童に持たせ、弓取りなほし、幕のきはに畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮をさり、我が身は疊にぞ直られける。「それへ〜。」とぞ仰せらる。しばらく辭退して、敷皮にぞ直られける。佐殿は御曹司をつく〜と御覽じて、まづ涙にぞ咽ばれける。御曹司もそのいろは知らねども、共に涙に咽び給ふ。

互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙をおさへて、さても、頭殿におくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候ふ

頭殿
源義朝

池の尼
平清盛の繼母、池禪
尼ともいふ。

伊東
伊東次郎祐親。

北條
北條時政。

大事をこそ……候へ
八箇國

關東八箇國、相模・武
藏・安房・上總・下總・
常陸・上野・下野。

故左馬頭
義朝

時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由は、幽かきに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思し召し忘れ給はて、取り敢へず御上り候ふ事、申し盡くし難く、悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を初めとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはす人もなし。皆平家に相従ひたる人々なれば、頼朝がよわげを守り給ふらんと思へば、夜もよもすがら、平家の事のみ思ひ、又或時は、平家の討手上せば、やと思へども、身は一人なり、頼朝自身すゝみ候はば、東國おぼつかなし。代官を上せんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、かへつて東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひがたく、今御邊ごへんを待ち付けて候へば、故

八幡殿

八幡太郎義家。

後三年の合戦

寛治元年(三十四)清原
眞衡を助けて武衡・
家衡を攻めて平定し
た戦。

栗屋川

今岩手縣巖手郡厨川。

刑部丞

源義光。

いかでかまさるべき

左馬頭殿さうまごうだん蘇すからせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡殿の後三年の合戦に、むなうの城を攻められしに、多勢皆亡されて、無勢になりて、栗屋川のはたにおし下りて、幣帛を捧げて王城をふし拜み、南無八幡大菩薩御擁護をあらためず、今度の壽命を助けて、本意をとげさせて給べと祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にやありけん、都にておはする御弟、刑部丞よりのしやうは内裏に候ひけるが、俄に内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られけり。路次にて勢うちくははり、三千餘騎にて栗屋川に馳せ來て、八幡殿と一つになりて、終に奥州をしたがへ給ひけり。その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ參らせたところに、いかでかまさるべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を休めん。」と、宣ひもあへず涙を流し給ひけり。御曹司は、とかくの御返事もなくして、袂をぞ絞

山科
京都市東山區。

鞍馬
鞍馬寺、京都の北方
かたの如く
方便

さてこそ……けれ
義經記
八卷、著者不明。
源義經に關する傳記
物語。

られける。これを見て大名小名、たがひの心の中おしはかられ
て、みな袖をぞ濡らされける。

暫くありて、御曹司申されけるは、仰せの如く、幼少の時御目に
かゝりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科やまのに
候ひしが、七歳の時鞍馬へまゐり、十六までかたの如く學問を仕
り、さては京都に候ひしが、内々、平家方便をつくる由承り候ふ間、
奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛のよし承りて、
取りあへず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見
參に入り候ふ心地してこそ候へ。命をば故頭殿に參らせ候ふ。
身をば君に參らする上は、いかゞ仰せに従ひ參らせては候ふべ
き。」と、申しもあへず、又涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこ
その御曹司を大將軍に上せ給ひけれ。
(義經記卷四、賴朝義經に對面の事)

養和元年
紀元一八四一年。

一萬・箱王
工藤家次「祐家・祐親」
「祐繼・祐經」
「祐奉」
「祐成(一萬)」
「時致(箱王)」
母
名は滿江。祐奉の死
後祐信に再嫁した。

曾我殿
曾我太郎祐信。
曾我殿こそ……あれ
方ぞ……なかりける

工藤一藤
工藤祐經。

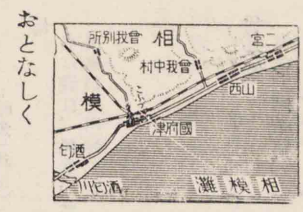
九 空ゆく雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、新玉の年立返り、一
萬は九つ箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の
上にたはぶれながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞ
や。その佛はいづくにましますぞや。往きて拜みたてまつら
ばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、遙に忘れたる來し
かたも、今更思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く
泣くのたまひけるは、あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ。」
と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりけ
る。

箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらん「狩場より歸り
給ふ道にて、工藤一藤とやらんに射られ、死に給ひぬ。」と、兄御前

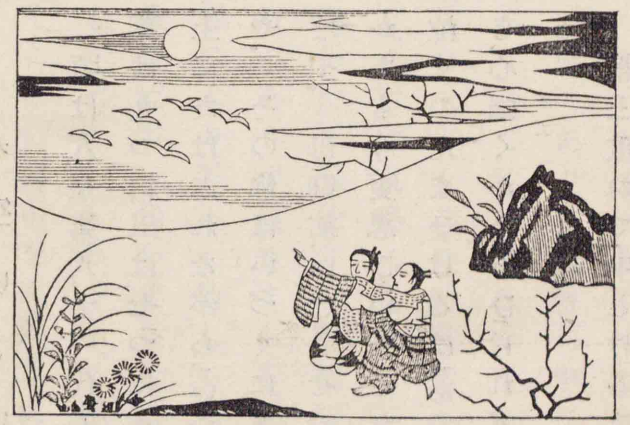
きりもの

此の里
相模國足柄下郡曾我
中村



おとなしく

は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆



我兄弟雁を見

へ、箱王殿空を飛ぶつばさも、皆別のつばさぞまじへざりける。

へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里に在り知らずや過ぐらん。など、おとなしく語りければ、母より始めて、女房達迄皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びあるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給

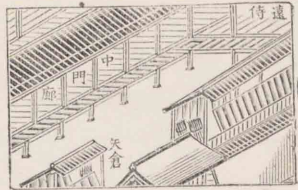
にてぞ……らん
人倫
和殿

河津殿
河津三郎祐泰
ありき……なん

あさまし
人もこそ聞け
和上藤

五つ連れたる鳥の中、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬことこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われらより幼きものにて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありきことの羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差し入れてさめくと泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きおたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤達、夜も更けぬるに、左様にておはするぞ。とくとく入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃

遠侍



一の能
領掌

げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に入りけり。
或時、兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに二人立ち向ひ、あなたこなたへ射とほして、一萬箱王に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿は十三、われは十五だにもなるならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人々思ひけり。

一萬が乳母、このよしを聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く／＼語られけるは、「まことか、おのれらがさも怖ろしき謀叛を起さん

伊東入道

名は祐親

千鶴御前

母は祐親の女

松河が淵

伊豆國田方郡伊東町

にある

石橋山の合戦

治承四年(一一八四)八月

石橋山

相模國足柄下郡

土肥の杉山

土肥の山谷、石橋山

の南

梶原景時

頼朝の寵臣

稀有の命

と議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千たび百たび悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申してとゞまりたり。そのゆるは、鎌倉殿石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返しまゐらせて、「二人の幼きものどもを助けて給はらん。」と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それほど志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ。」と仰せられけるゆるにこそ、汝等も安穩にて今まで稀有の命を保ちたるぞ。それにつ

生々世々

きても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡くすべきか。鳥類畜類にても恩を知るところを聞け、況や汝等人倫に於てをや。しかるを、却つて曾我殿に歎を與へんこと、かへすくも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛をとゞむべし。』と、口説きたてて誠められければ、二人の子供目と目とを見合はせ、顔打赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬ所にては内々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふ事もなし。母も内々怖ろしき者共の心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれる。

(曾我物語)

曾我物語

十二卷、著者不明、曾我兄弟の復讐の顛末を記した物語

吉江喬松

舊號孤雁、長野縣の人、明治十三年生、早稲田大學教授

去年

大正十一年

一〇 自然の寂光

吉江 喬松

秋から冬にかけての日本の空は、北および西の歐羅巴には見られない清澄な輝かしさを持つてゐる。殊に氣候の變化の烈しかつた去年の後半は、日本の秋を一層鮮やかに彩つた。南歐に見る如き光ある日本の空は、いつもより一層の紺青を深め、輝く黄金の萬片をこの大空の下に翻してゐるいかにも東洋らしい銀杏樹をして、いつもよりは一層嚴な姿を、清澄の空氣の中に恣にさせてゐた。

輝く光は日本に住む者の悦びである。いかに砂塵と、無秩序と、喧騒と、焦慮と、疲勞と、困憊とのうづまく日本の首都の上にも、この秋の寂光は一道の清涼の氣を漂はせて、人々の胸の中にまで、一時の靜穩を植ゑつけずには置かない。

困憊
うづまく

日本の澄み渡る寂光の十一月は、パリにおいては曇天のいぶせき天候のみのつゞく季節である。さらにロンドンならば最早濃い霧が全市を包んで、方三尺の世界しか我々は持ち得ない極めて窮屈なわびしい時節である。パリのこの打續く曇が破れて、時とすると一時の幻影の如く、廓外の森林の頂を黄に染め出し、うす青い空をのぞかせ、忙しげに響く衆鐘の合唱を都會の上にとゞろかせ、雲の中に途を失つてゐた渡り鳥の群を俄に元氣づかせ、あわたゞしい悦びを人々の胸に蘇らせることがある。また時とするとロンドンの濃い霧が、一層濃くかたまつて雨となつた後などには、薄い日の光が天の一方から落ちて、思ひもよらない街路の角の、薄灰色の建物の壁を照らし出すことがある。路を行く人は、何か思ひもよらぬ不思議なものに打當りでもしたやうに、げんげんな眼をびつと、その照らし出された壁上にやつ

郷愁

たばかりで、黙々として通つて行つてしまふ。

そんないぶせき都會にゐる日本人ならば、又そんな一時の光の戯に接してもするならば、必ず秋の故國を思ふ。寂光の故郷を思ひ出す。日本人が他國にゐて思ひ出すのはこの秋の光である。我々が持つ郷愁はこの光、寂光に對する思慕の情である。我々は南方を慕ふ心を持つてゐるが、たゞり落つる目くるめく赤熱をこふのではない。我々は北方を愛するけれど、闇の與ふる不氣味さ、恐ろしさ、殘忍さを愛するのではない。赤熱の中に漂ふ静けさ、闇に浮ぶ微なる光、即ち寂光を求めてゐるのである。

この寂光が奪はるゝ時、我々の心には、一種の焦慮が生まれる、混亂が生ずる、郷土思慕が胸をかき亂す。右往し左往して落著く所を知らなくさせられる。

焦慮

オルグ
フランス語、オルガ
ンの一種。

秋の森は一つの會堂である。こゝに朽ちゆく木の葉の香が漂ひ、こゝに萬片の錦繡が翻り、静寂の中にとけ込む如き、ひき入るゝ如き悠久の思がある。黄葉に飾られた白樺の林の中で、その黄葉の間をすかして眺めらるゝ清澄なる空の色、原始の時代人には、神の衣の裾とも思はれたでもあらう。渡り鳥の群は巡禮者の隊の如く、一群また一群とこゝをめぐめて集まり、散ずる。樹々の間を靜に渡る風の響は、一種のオルグの音の如く、幹は群立する會堂の圓柱である。

最後の輝、秋の光榮のなかに、人は水の如く冷たく澄んだ一種の默せる、胸に徹する力を覚える。彼は秋の輝の中で歌はんとせず、寧ろ散りしく木の葉の囁きに耳を傾け、大地に眼を伏せて、黙々としてこの天地の奏樂の中を歩み行かうとする。

彼は春の森に於けるが如く、梢をかすめて流るゝ雲と共に、ゆ

大同化の悦樂

るやかに溶けて流るゝのを覚えるのではない。大同化の悦樂のなかに自己を忘れるのではない。彼は夏の草原に臥して、地氣とその發生とを身に感じて、自然の野生の動きに身を委せるが如きではない。秋の森では、彼は流れ散る中に、自分を立てねばならぬ。自分をつかまねばならぬ。默想が生じ、反省が起る。口をつぐんで、空へ眼をやり、地へ視線をおとす。彼の感覺は開放せられても、彼の生命は純化せられて、透明となつて或一點に立たねばならぬ。

それ故秋になれば、人は故國を思ふ情にたへられぬ。旅愁が胸に湧く。郷愁が彼をして開き切つた感覺の中に碇をおろさしめる。

かつて死刑の宣告を言ひ渡さるゝ囚人があつた。彼はその宣告と理由とを長々言ひ聞かされてゐる間、不圖眼を仰いで、法

庭の高い天井を眺めやつた。その天井近い一角から、紺青の空の一片が、ほんの一片が、青い閃影をのぞかせてゐた。彼はそれに見入るともなく見入つてゐるうちに、自分が今死刑の宣告を受けつゝあることも忘れて、かつて秋の野原を日の光を受けてのび／＼と飛びまはつてゐた事を思ひ出した。枯草の匂すら彼の鼻を襲つた。彼は幸福であつた。彼には死刑など忘れさせた。死の報告を、しかも人の手によつてもち來さるゝ死などを聞かされて、いら立つが常なる人の心に、空は永久の静寂をその青色のなかに漂せて、彼の心の中へ一種の寂光を注ぎ込んだのであらう。彼は吸ひこまるゝやうに、その寂光の中へ身をまかせて微笑した。

暗黒はおそろしい、燦爛目を奪ふ光は狂はしい、自然のなかの寂光のみが、我々の生命を育ててゆく。

(自然の寂光)

卷末附圖參照

小泉八雲

我が國に歸化した英國人、本名はラフカヂオ・ハーン、詩人、前東京帝國大學講師、明治三十七年歿、年五十五。

松江

島根縣松江市。

一一 神國の首都

小泉 八雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、最もあはれに思はれる。米搗の音は、日本といふ國土の脈搏である。

それから、禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて、私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に、行商人の物賣の聲「大根やい、蕪菁や蕪菁」「薪や薪」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟かな緑の雲越しに、朝景色を眺め

勤行 禪刹

大橋川
松江市を貫流する川
宍道湖
島根縣八束郡の南海
東西十六軒餘、南北
約六軒、周圍約五十
三軒
杳乎

閉ぢた

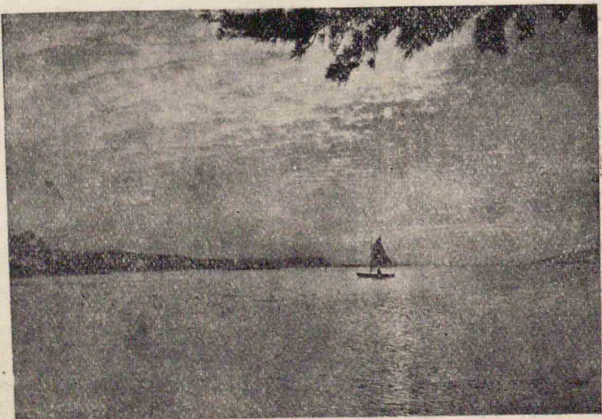


小泉八雲

やつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、戦く
様に萬象を映寫して、微に光つてゐる。この川は宍道湖に向つ
て口を開け、湖を右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。
對岸の日本の家屋は、戸
がみな閉つてゐるので、
恰も箱を閉ぢたやうで
ある。夜は明けたが、日
がまだ出ない。遙に見
渡すと、薄色の霞が湖水
の盡端に長くたなびい

味爽

蔽うて、峰から峰へ、果知らぬ長さの紗のやうに横に延びてゐる。
だから湖水は實際より遙に大き
く、味爽の空の色と入り交じつた
美しい幻の海となつて見える。
山々は霧の中に浮かぶ島嶼で、夢
の様な一帯の丘陵は、はてしのな
い土手道かと怪しまれる。そし
て霧が立つに連れて、その趣は徐
に變つて行く。朝日の黄色な縁
が見えてくると、今迄のよりは更
に強い、細やかな光線——分光鏡の
紫と青貝色——が水面を射る。梢
の上は弱いひかりを受ける。水のかなたにある高い建物の木



宍道湖

蓬萊

地の色が、美しい靄の色で蒸氣の立つ黄金色へとかはる。朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げんとしてゐる。こんな奇な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精霊である。しかしこの精霊は、雲と同様光線を受けて薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿は見える。めい／＼帯に小さい手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは、神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の柏手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い優美な、そして新月のやうに彎曲

漱ぐ
潔齋

東雲

した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは、人々が、今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふ事を謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無数の人々の衷心である。朝日に向つただけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社へ向つてもさうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山いちばたやまの高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ薬師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に随ひ、掌を合はせて軽く擦る者もある。しかし、日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰

杵築の大社
島根縣杵築町に在る
出雲大社。

一畑山
島根縣簸川郡。

も誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始まり出し、橋の上には、からころといふ下駄の音が、だん／＼高く響いて来る。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音楽的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋のうへを通る數へきれぬ人の足が、ちら／＼するのは、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、ギリシヤの古甕にゑがいた人物の足のやうに軽やかで、そして足を運ぶ時指を先に下す。實際下駄ではほかにしやうがない、それは、踵は下駄にも著かねば地にも著かないし、足は楔形の木の高臺を前へ傾けては進むのであつた。足の下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者には困難で

均整
ゑがく

躓く

闊歩
(潤)

あるのに、日本の子供は、三寸もある臺の下駄を穿いて、親指と他の四本の指に挟んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して、駈けて行く。それでも躓きもせず、又下駄もぬげない。更に珍らしいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかし、それを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに、樂々と闊歩する。

やがて、學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の著物の闊い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏をするやうに見える。親船は、白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐きはじめた。

(まだ馴れぬ日本の瞥見)

一三 雅文抄

一 えぞの咄

そこら
玉の緒
またうす
いを
わらうづ
（わらぐつ）

えみしの人に飯を與へければいと喜びながら、そこら食ひこぼしてけり。「やよ、米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかになすか。」といへば、「われ等は、米食ひて命をまたうするに、はあらず、鮭といふいを食ひて生くるを。」といふ。「さらば、鮭のいをにて命をばのぶるならば、それをば尊ぶべからん。いまその足に穿きたるものは、鮭の皮ならずや。」といへば、しばし頭かたぶけて、「君の足につけ給ふわらうづとやらんは、かの米の出でくる草にはあらずや。」といひしにぞ、「悔るまじきことよ。」と人のいひしとぞ。

わが國の人は餘所の事を知らねば、えぞ人はなりかたちわが

攀
（うづ）
飢

國の人とたがへば、いとおろかにて何知らぬ者よと思ふたぐひぞ多き。それより唐國にてもあれ、えみしの人にもてあれ、たゞ姿の見馴れぬを見ては腹かゝへ、言葉のわきがたきを聞きてはまた笑ふ。心せば、餘所見ぬ故なるべし。
（花月草紙）

二 黄金を好むこと

いやしき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、ひさぎて黄金にかへて、命にもかへじと袋に入れて持ち居たるに、秋の末つ方にはかの水出でにければ、かの袋をくびにかけて高き所へ行かんとするに、はや水嵩たかくて行くべきやうなければ、せん方なく木に攀ぢ登りけるが、ことの外に飢にのぞみけり。さるに、米いさゝか苞にし負ひて、水遊ぶ者を見て、かの袋の黄金を見せ、これを皆まゐらせん。その負ふ所の米いさゝか分けて賜は

花月草紙

六卷、松平定信の隨筆書。松平定信、白川の城主、號は樂翁、文政十二年(四六)歿、年七十二。

須賀直見

伊勢國松坂の人、宣長の門人。

たとへなりかし

宣長

本居宣長、こゝは自分を指す。

縣居の大人

賀茂眞淵、遠江國の人、國學者、明和六年(四四)歿、年七十三。

れ。」といへば、いと怒りて、「にくきをこの言ひざまかな。かゝる時黄金もちて何にかはせん。」と言ひ棄てて遊ぎ行きしとなり。
(花月草紙)

三 書讀むことのたとへ

須賀直見がいひしは、「廣く大きな書を読むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ所も多かるを經行きては、又おもしろく目さむる心地する浦山にもいたるなり。又、足強き人は早く、弱きは行くこと遅きも、よく似たり。」とぞいひける。をかしたたとへなりかし。
(玉勝間)

四 縣居の大人の御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人の教をうけたまはり

古事記

三卷、元明天皇和銅五年(二七)史臣太安萬侶が神田阿禮の口誦を筆記した歴史書。

萬葉

萬葉集、二十卷、仁德天皇の御代より淳仁天皇の天平寶字三年(四七)までの和歌四千四百九十六首を集めた和歌集。

そめしころより、古事記の註釋を物せむのこゝろざしありて、そのこと大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、「われももとより神の御ふみを解かむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古のまことの意をたづねえざばあるべからず。然るに、そのいにしへのこゝろをえむことは、古言をえたるうへならではあたはず。古言をえむことは、萬葉をよく明らかむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉を明らかめむとするほどに、すでに年老いて、殘のよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學びなば、その心ざしとぐるこゝろあるべし。たゞし、世の中のもの學ぶともがらを見るに、皆ひき、所を經ずて、まだきに高きところののぼらむとする程に、ひき、ところをだにうるこゝろあ

すめり
おきてこそ……わ
さなれ

なのぞみそ
なむ……たりし

あらぬから意

玉勝間

十五卷、本居宣長の
隨筆書
本居宣長—伊勢松坂
の人、徳川中世の國
學者、享和元年(三興六
二)歿、年七十二。
壬子
享保十七年(三三九二)。

たはず、まして高き所はうべきやうなければ、みなひがごとのみ
すめり。このむねを忘れず、心にしめて、まづひき、所よりよく
かためおきてこそ、高きところにはのぼるべきわざなれ。わが
いまだ神の御ふみをえとかざるは、もはらこのゆるぞ。ゆめし
なをこえて、まだきに高き所をなのぞみそ。」といとねもごろに
なむ誠めさとし給ひたりし。この御さとし言のいとたふとく
おぼえけるまゝに、いよ、萬葉集に心をそめて、深く考へ、くり
かへし問ひたゞして、いにしへのこゝろ詞をさとりえて見れば、
まことに世の物識り人といふものの神の御ふみ説ける趣は、み
なあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものに
なむありける。

五 壬子試筆の詞

(玉勝間)

白駒の隙すぎ易し
黄金の術
犬馬の齡

董生

唯下シ憤ヲ發シテ
書ヲ讀ム、三年闕ヲ
窺ハズ(漢書、董仲舒
傳)

程・朱

二程子及び朱子、二
程子は程頤及び其の
弟程頤、朱子は朱熹
共に道學者

かをる

鄒・魯

鄒は孟子の生國、魯
は孔子の生國、よつ
て孔子の道をいふ。

韓・歐

唐の韓愈、宋の歐陽
修、共に大文豪であ
る。

邯鄲の歩を學ぶ
學ぶにぞ……ぬる

日月迭に移つて、白駒の隙すぎ易く、衰病日に侵して、黄金の術
なり難し。されば犬馬の齡、これまであるべしともおもはれざ
りしが、いつしか老の波より來て、今年七十あまり五つの春にも
なりぬ。あまつさへ近き頃より身



室鳩巢

に痿疾を得て手足もあがらず、起居
もなやめるまゝに、昔の董生を學ぶ
とにはあらねども、この三とせ春の
園を窺ふこともかなはねば、閨の中
ながら梢に傳ふ鶯の音にのこりの
夢をさまし、枕にかをる梅が香に過
ぎし昔をしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若
かりし時より學の窓に年を経るかひありて、程朱の道に従ひて
鄒魯の風を尋ね韓歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ老の寢

富貴は云々

不義ニシテ富ミ且貴キハ我ニ於テハ浮雲ノ如シ。(論語)

禍福は云々

夫レ禍ノ福ト何ゾ糾纏スルニ異ナラン命説クベカラズ、執レカ其ノ極ヲ知ラン。(漢書 賈誼傳)

何か……あるべき

三綱五常

ゆくこそなげかしけれ

蚍蜉

蚍蜉大樹ヲ撼カス、笑フベシ自ラ量ラザルヲ。(韓退之)

精衛

發鳩ノ山ニ鳥アリ、精衛トイフ、常ニ西山ノ木石ヲ取リテ以テ東海ヲ填ム。(山海經)

覺も慰みぬる。

さても多くの年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互にゆきかふをば、夢とやいはん現とやいはん。まことに富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如しといへるに何か違ふことあるべき。中にたゞわが聖人の立てたまへる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく利慾にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとよりいやしき身にて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼かし、精衛が海にうづむるに似たるべし。さはいへど、わが儒分内のことなれば、これを度外に置くべきにもあらず。よりに思

するこそうけられぬ

曲學阿世

たとひ……とも

あらたまの

ならし

駭臺雜話

五卷、室鳩巢の隨筆書、室鳩巢一名は直清、徳川中世の儒者、享保十九年(三三九)歿、年七十七。

ふに世に老師宿儒と稱する人の、好んで異説をほしいまゝにし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこそうけられぬ。たゞ務めて新奇を競うて俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしきことなり。古人の所謂曲學阿世とは是等をいふなるべし。

よし人はさもあらばあれ。たとひ風俗は昔にあらざるなりぬとも、わが身一つはもとの如く仁義の道を守り、唯前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししともいふべけれ。然るに、あらたまの春のはじめとて、人は皆おのがじし身の福を萬代と祝ふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらずめでたきものはこの道なりとて、かくなん筆を試みるものならし。

(駭臺雜話)

藤井乙男
號は紫影、兵庫縣の
人、明治元年生、文
學博士、前京都帝國
大學教授、
輿衆

一三 諺

藤井乙男

格言は賢哲の垂訓にして、俚諺は凡俗の信條なり。前者は明らかにその立言者を求め得べく、後者は輿衆の聲にして、その作者を知るべからず。隨うて、その發生の時期を精確に定めんと頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間、その發生の時期前後新古の關係變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。吾人が座談演說等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より知識的・道德的遺産の一部分として繼承せるものにして、吾人が新たに製作したるものにあらず。有史以來、世々の人類が、内外諸種の天然・人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々雜多の經驗を積み、人生に普通なる知識を感得して、後世子孫に遺せるもの、之即ち今日行は

アリストテレス
ギリシヤの大哲學者
(西曆紀元前三四—三三三)
ツレンチ
アイルランドの宗教家、言語學者、詩人。
(西曆一〇七—一八六)

枕草子
清少納言の隨筆。
土佐日記
紀貫之が土佐國守の任満ちて歸京せし時の紀行。

る、諺の多數なり。「手輕にして受用し易きが爲に、滅亡の非運を免れし古知識の斷片なり。」とは、二千年の昔、俚諺研究の率先者アリストテレスすでに之をいへり。ツレンチは、その俗諺論に於て、「今日文明諸國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺産にして、或は口々に語り継ぎ、或は前代の記者によりて後世に書き傳へられて、希臘・拉典の古きより中世の諺に至るまで、依然として今日に存し、諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならんと一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠久なるを發見すること少からず。」といへり。現今行はるゝ我が國の諺にも、其の發生時代のすこぶる遠きものあり。「痛む上に鹽塗る。」「重荷に小づけ。」の如きは、既に萬葉集に見え、「一升榊に二升は入らぬ。」といふは、枕草子に出て、「死ぬる子みめよし。」「飯粒で鯛釣る。」といふは、共に早く土佐日記に見えたり。

載籍

此等が孰れも千年内外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々のなべて豫想せざる所なるべく、今日にては既に之を徴すべきものなしと雖も、その淵源の遠きこと、前數者に相譲らざるもの、尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同一なる諺の數次第に多くなりゆくは固よりいふ迄もなき事にて、鎌倉・室町時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。

屹峙

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少からず。四面海を環らし、東海に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も、亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが

内外典
將來

信 偈
胚 胎
詩 經
五經の一、殷代より
春秋時代までの詩三
百十一篇を輯む。

如き患少しと雖も、支那・朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、尙その正體は、儒佛にあらざると疑はるゝもの往々之あり。殊に僧徒は、布教の必要上、經文中の金言を俗譯して、眼に一丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。「合はせものは離れもの。」「仰向きて唾はく。」「蛙の面に水。」「鹿の角を蜂が螫す。」「の如き、巧に日本化せられたり。」「渴すれども盜泉の水を飲まず。」「麒麟も老いては驚馬に劣る。」「の類は、何人も一見して國産に非ざるを知るべきも、麻につるゝ蓬。」「井の中の蛙。」「情に刃向ふ刃なし。」「の如き、極めて通俗にして平易なるものが、信偈なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。「壁に耳。」といふも古き諺なれど、既に詩

經に「君子無^{カレク}易^{モテフル}由^ル言^ハ耳^ヲ屬^ス于^ニ垣^ニ」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。

維新後、西洋諸國との交通盛にして、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、外國の諺の輸入せられしもの、またこれあり。「時は金。」「習慣は第二の天性。」「二兎を追ふ者は一兎をも獲ず。」などの類、即ち是なり。なほ又、人の社會に立つや、生活上絶えず新經驗に遭遇し、知識上に道德上に、新たなる自家の確信を生ずるや、その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、その文句にして幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般國民の贊同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有するに至る。

一國の俚諺は、生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行はれて既に國民の記憶を去りたるものはた少からず。此の如く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するものなり。

古來の典籍殊にその通俗的なるものは、幾多の諺をその中に採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は、往々世人に裁斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては、漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘り、一見その出所を辨知し難きまで相貌を變ずるに至る事あり。和歌俳諧俗歌の類は、その形體短小にして、引用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用せらるゝ物多し。和歌より來れるものは、例へば、

山川の
空也上人繪詞傳、

思ふこと
後水尾院の御製とい
ひ傳ふ。

山川の末に流るゝ椽がらも

みをすててこそ浮かむ瀬もあれ

思ふこと一つ叶へば又二つ

三つ四ついつもむつかしの世や

の如き、俳諧の附句及び俳句川柳より來れるものは、例へば、

救濟 室町時代の人、連歌に巧であつた、二條良基の師。

冠里

安藤對馬守信友の號、奥州磐城平の藩主、享保十七年(一七三三)歿。

千代

福田氏、加賀の人、女流俳人、安永四年(一八〇三)歿、年七十四。

也

横井氏、尾張の人、俳人、天明三年(一八二二)歿、年八十二。

蓼太

大島氏、信濃の人、俳人、天明七年(一八二七)歿、年七十。

人口に膾炙す

伍を同じうす

王彦章

支那梁の人、字は子名、歷山大王

マケドニヤ王フィリ

ツプの子、(西曆紀元前三三三)

前二二一三三)

草の名も所によりて變るなり
浪花の蘆は伊勢の濱萩

救濟

物いへば唇寒し秋の風

芭蕉

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

冠里

百なりや蔓一すぢの心より

千代

化物の正體見たり枯尾花

也

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

蓼太

の如きものはなり。

訓誡の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌俳句が、諺として用ひらるゝのみならず、偉人名士の語は、直に當時の人口に膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔孟釋迦などの金言の如きはいふも更なり。王彦章が「豹死留皮、人死留名」といひ、歷山大王が、波斯の大軍來り襲はんと

定家

藤原俊成の子、歌人、仁治二年(一一二二)歿、年八十。

揆一

庸流

諷刺

標置

するを聞き、自若として、「一屠兒、千羊を恐れず」といひ、家康が五字七字の戒、うへをみな。みのほどをしれ。」の如き、一度此等偉人傑士の口頭を出づれば、千萬人の間に傳誦通用せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が、「和歌に師匠なし」と教へ、芭蕉が之に倣ひて、「俳諧に古人なし」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狭しと雖も、名人の一語、世上の諺となるに至つては、其の揆一のみ。

諺は通俗をむねとすれども、必ずしも凡人庸流の口にのみ出づと斷ずべからず。寧ろ、世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地なる者にして、始めて痛切警拔なる人生の批評諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝。」「花は櫻木、人は武士」と、高く標置し、馬方船頭、お乳の人。「商人の空誓文」と、罵倒したるが如き、その立言者の地位如何を

喧鬧

餓えす

凍えす

話柄

附會

察するに難からざるなり。詩歌格言等より來れる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれども、此の如きは、無數の俚諺中極めて小部分にして、その大多數は、何時如何にして生ぜしか、生誕の時日も、出自の父母も、漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭に置き去りにせられたる棄兒の如し。幸にして、この兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより、衆人の愛顧を得、餓えず凍えず、無事に成長して世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として少しもありし昔に異ならざるなり。されば諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少く、諺の起源といはんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらざると疑はるゝもの十の七八なり。さるを、強ひて之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く、所謂骨折損の草臥れ儲けたる事多かるべし。

金子元臣

東京市の人、明治元年生、宮内省御歌所寄人、國學院大學教授。

頤を解く
突梯

一四 川 柳 點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして、直に人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左に其の二三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され。」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これも、あがるなといはぬばかりなり。竹の子は盗まれてから番がつき

後の祭

よくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりくす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟渴虎ヲ取ル。」と書きしを、いみじき手がらの様に驚ける人、もし此の句を見れば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを。」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考へ物なり。

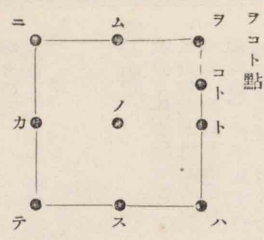
提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてく、目あきは不自由な。」といひしに似たり。

曲盡

道灌

太田道灌、足利時代の武將、文明十八年(三三六)歿、年五十五。
いそがずば濡れざらましを旅人の、後よりはるゝ野路の村雨をかし
塙檢校
名は保己一、國學者
文政四年(二四二)歿、年七十六。



片假名に四角な文字は手を引かれ
漢文に捨假名、反點の左右にうるさく附き纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには「四角な文字に灸をすゑ」といはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、この類の誤多し。あながちに此の狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實

小野九太夫
戲曲假名手本忠臣藏
中の人物

尋常茶飯事

口吻

戸隠明神
長野縣戸隠山手力雄
神を祀る

能因

歌僧、俗名橘永慢、
又古曾部入道ともい
つた、後鳥羽天皇の
頃の人。

まうけ

袋草紙
四卷、藤原清輔の著、
歌學の書

なるをいかにせん。かの赤穂の城渡しにお金配分を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか。かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事傳説史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。鐺けらに髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働はたらきあり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。

天目に焦がして、顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物に其の沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但し袋草紙に、「一度においては實か。八十島の記を書けり。」とあり。

あらざりけらし

忠盛

平清盛の父、仁平三
年（一一三三）年五十八

隼太

源頼政の郎等猪俣太

盛衰記

源平盛衰記、著者不
明、二條天皇から安
徳天皇まで凡そ二十
餘年間の事實を記し
た軍記物語。

時致

河津祐泰の子幼名箱
王丸、建久四年（一一
三三）年二十。

祐成

時致の兄、幼名一萬、
建久四年（一一三三）
年二十二。

何時も室内旅行家にはあらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる、滑稽突梯容易に及び易からず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政鶴を射る條に「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと、矢所さだかならず。」とあり。乃ち、郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあてて、まご／＼する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に駆けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大

佐野

佐野源左衛門常世、
謡曲鉢の木に出てゐる。

戸塚の阪

神奈川縣鎌倉郡。

越えなづむ

道風

姓は小野、書家、三蹟の一人、
康保三年(二六三六)歿、年七十一。

文王

周の武王の父。

太公望

呂尚といふ、周國の文王・武王の功臣。

波瀾

根の鞭を添へたるは畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるはこの作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乗力なき源左が瘦馬さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「な」との語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

一五 春の潮

音たてて春の潮の流れけり

高濱 虚子

桃咲くや湖水のへりの十箇村

河東碧梧桐

大和路や雲雀落ち込む塔の蔭

巖谷 小波

残りなく花散る罌粟の夕かな

松瀬 青々

睡足りて姑く蠅と相對す

尾崎 紅葉

西瓜太郎躍り出でよと割りてけり

沼波 瓊音

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡 子規

明月や橋高らかに踏み鳴らし

内藤 鳴雪

筆とる我にひそと炭つぐ母哀し

荻原井泉水

初冬や竹切る山の鉦の音

夏目漱石

島木赤彦

本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一。

一六民 諸

島木 赤彦

弛 緩

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅撰に至つて、著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

民衆心理

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出さ

空 疎

勅撰集時代

醍醐天皇の時勅して古今和歌集を撰せしめられた時から、後花園天皇の時新編古今集を撰せしめられた時まで、五百三十餘年間をいふ。

神樂歌

神樂に合はせて歌ふ歌。

催馬樂

雅樂の一種。

袖こそ破れめ

れたもので、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して、勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流してゐることは、決して不自然ではない。

このことは、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謠を検べて見れば、容易にうなづくことが出来るのである。

笹分けば袖こそ破れめ、利根川の石は踏むともいざ河原より。

しながどり猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ舟かたぶくな、若草の妹も乗せたり我も乗りたり。

惻々

乳が崎
大島の西北端

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうしてこの民謡の系統は、足利・徳川の各時代を経て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謡の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産出したところの、惻惻として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましょが、それから先は神だのみ。(伊豆大島の唄の如き、必ずしも船唄とばかりは言へぬが、海中の孤島に頼

浅間
信濃と上野との國境に跨がる活火山、海拔二五四二米。

追分
長野縣北佐久郡にある町もと中仙道と善光寺道との分岐點であつた。



碓氷峠
浅間山の南、群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡の境にある、抜約一〇〇〇米。
坂本
群馬縣碓氷郡にある町、碓氷峠の東麓。
中仙道
東山道を経て江戸から京都へ行く街道。



りなく住む人々の心理が、神だのみの哀音となつて現れてゐる

純粹さを味はふべきである。

浅間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、浅間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。浅間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。その宿引の女が、旅人を呼びとめて、一宿を勧める心が、一夜の宿を勧める歌謠を、勧められる旅

輕井澤
長野縣北佐久郡東長
倉村、避暑地として
名高い。

人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には、いづれも淺間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや、雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見れば親里がこひしや。

麥をつくのは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落ち着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥について掌に出來たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは恐らく人麿貫之の秀

人麿

柿本人麿、歌人、持統・文武の二朝に仕へた。

貫之

紀貫之、平安朝時代の歌人、天慶九年(八六六)歿、年六十五。

地方的個性

歌にも優るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出來ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生まれ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舎に生まれ、測する事が考へ合はせると、民謡と地方との關係を、ほゞ推測することが出來よう。たゞ、民謡の優れたものは、それが口う

稻生澤村
静岡縣賀茂郡下田町
の近傍



つしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、
いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少
くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人
とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れ
て来る。例へば「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのみめを見れ
ば、親の在所こひしよ。

と、唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異
にしてゐるのが味ははれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まらずや、いなごや、きりすき
すき葦のこやのうらに棲まらずや。

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふに、この
歌謡は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或

はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子を持つが
爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐる
のである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美
しい心情を持つた民謡が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の
口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つた
すきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか。」
といふその心は、なんとといふ單純な、同情の籠つた、愛に満ちた心
であらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、
一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに
尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論、「この稻を刈りあげて」
であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄

出色

八ヶ嶽
長野縣と山梨縣の國
境にある山 海拔約
二八九九米。



は他の地方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して三の坂越しや強清水。

これは信濃國の民謠中、出色の一である。草刈馬に乗つて、八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷くしみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖いが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謠の中にも現れてゐるのである。

(赤彦全集第五卷)

一七 折焚く柴の記の序

むかし人はいふべき事あればうちいひて、そのほかはみだりに物言はず。いふべき事をも、いかにも言葉多からでその義を盡くしたりけり。我が父母にてありし人々もかくぞおはしける。父にておはせし人の、その年七十五になり給ひし時に、傷寒をうれひてことされ給ひなむとするに、醫の來りて獨參湯をなむすゝむべきといふなり。世のつねに人にいましめ給ひしは、「年わかき人はいかにもありなむ、齡かたぶきし身のいのちの限りある事をも知らで、藥のためにいきぐるしきさまして終りぬるはわろし。あひかまへて心せよ。」とのたまひしかば、この事いかにあらむといふ人ありしかど、疾病の急なるが見まゐらするも心苦しといふ程に、生姜の汁にあはせてすゝめしに、それよ

かくぞおはしける

父にておはせし人

新井正濟、久留里侯
土屋利直に仕ふ。

獨參湯

煎藥の名、氣つけに
効がある。

…をなむすゝむべ
き

いかにもありなむ

終りぬるはわろし

あひかまへて

のたまふ事もなかり
しい

さてこそありつれ

りいき出で給ひて、つひにその病癒え給ひけり。後に、母にてありし人の「いかに、この程は人にそむきふし給ふのみにて、また物のたまふ事もなかりし。」と、問ひ申されしに、「されば頭のいたむこと殊に甚しく、我いまだ人に苦しげなる色見せし事なかりしに、日頃にかはれる事もありなむにはしかるべからず。又世の熱におかされて言葉のあやまち多かるを見るにも、しかじいふ事なからむにはと思ひしかば、さてこそありつれ。」と、答へ給ひき。これらの事にても、このつねの事ども思ひはかるべし。かくおはせしかば、あはれ問ひまゐらせばやと思ふ事も、いひ出でがたくして打ち過ぐる程に失せ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる。世の常の事どもはさてもやあるべき、(おやおほぢの御事詳らかならざりし事こそくやしけれど、今は問ふべき人とてもなし。この事くやしさに、我が子ども亦我が如くの事あ

えらぶべしやは

前代

六代將軍徳川家宣

ありなまし

散位

丙申は享保元年(三三)五月

折焚く柴の記

三冊、新井白石の自

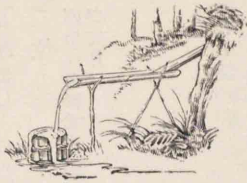
叙傳

新井白石一名は君美、江戸の人、家宣の侍講、享保十年(三三)五月、年六十九

りなむことを知りぬ。今はいとまある身となりぬ。心に思ひ出づる折々、過ぎにし事ども、そこはかとなく記しおきぬ。外ざまの人の見るべきものにもあらねば、言葉のつたなきをも、事のわづらはしきをもえらぶべしやは。それが中、前代の御事におよびし事どもは、いとまかしこけれど、世によく知れる人もなきは、おのづから傳ふる人のなからむもわびしからまし。我が子うまごの後までも、これらの事ども見むものは、おやおほぢの身をおこしし事もやすからず、親にてありしもの、前代の御恵をうけし事は、世の常ならざりし事をも知ることもありなむには、忠と孝との道にも違はざる事もありなましと、六十の老翁散位源君美、丙申の十月四日に筆を起しつ。

(折焚く柴の記)

栗栖野
今の京都市東山區栗
栖野



関伽棚



たわゝに
園ひたりしこそ、ま
ましかばと覚えしか

一八 徒然草抄

一 神無月の頃

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事
侍りしに、遙なる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵
あり。木の葉に埋もる、笕の雫ならでは、つゆおとなふものな
し。関伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあ
ればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、
彼方の庭に、大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、廻り
を厳しく園ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましか
ばと覚えしか。

(第十一 段)

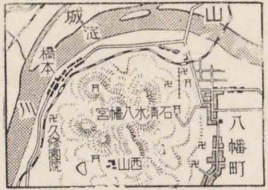
二 仁和寺にある法師

仁和寺

京都市右京區花園に
ある。

石清水

山城國綴喜郡男山八
幡宮のこと。



極樂寺

男山の麓にある寺。

高良

男山の麓にある社。

何事かありけん

参るこそ本意なれ

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ心う
く覚えて、ある時思ひ立ちて、唯一人かちより詣でけり。極樂寺
高良など拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの
人に會ひて、年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて貴
くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは何事
かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひ
て山までは見ず。」とぞ云ひける。少しの事にて先達は有ら
まほしき事なり。

(第五十二 段)

三 是も仁和寺の法師

是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、各遊ぶ
事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたはらなる足鼎を取りて
頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押し平めて顔を差

かなづ
抜かれず

腫れに腫る

くすしのがり

居たりけん有様さこ
そ…けめ



師法の寺和仁

入れて舞ひ出でたるに、満座興に入る事限なし。しばしかなで
て後抜かんとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞ
はせんと惑ひけり。とかくすれば、頸
の廻り缺けて、血たり、只腫れに腫れ満
ちて、息もつまりければ、打割らんとす
れども容易く割れず。響きて堪へ難
かりければ、かなはて爲べきやうなく
て、三足なる角の上に帷衣を打懸けて、
手を引き杖をつかせて京なるくすし
のがりゐて行きけるに、道すがら人の
怪しみ見る事限りなし。くすしの許
にさし入りて對ひ居たりけん有様、さこそことやうなりけめ。
物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「斯かる事は書にも見

耳鼻こそ…うすい
も

缺けうぐ
からき命

もろ矢

等閑

えず、傳へたる教もなし。」と言へば、また仁和寺に歸りて、親しき
者、老いたる母など、枕がみに寄り居て泣き悲しめども、聞くらん
とも覺えず斯かる程に、或者の云ふやう、たとひ耳鼻こそ切れう
すとも、命ばかりはなにか生きざらん。たゞ力を立てて引き給
へ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もち
ぎるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら脱けにけり。か
らき命まうけて久しく病み居たりけり。
(第五十三段)

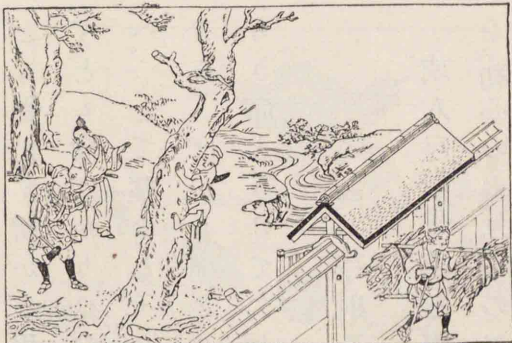
四 弓射る事を習ふに

或人弓射る事を習ふにも、もろ矢をた挟みて的に向ふ。師の曰
く、「初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を頼みて、初めの
矢に等閑の心あり。毎度只得失なく、この一矢に定むべしと思
へ。」といふ。僅に二つの矢、師の前にて、一つを疎にせむと思は

期す

一念
何ぞ…難き

おきてて



高名の木登り

むや。懈怠の心自ら知らずと雖も、師これを知る。この戒、萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむ事を思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむ事を期す。況や一刹那のうちに於て、懈怠の心ある事を知らむや。何ぞたゞ今の一念に於て直に爲る事の甚だ難き。

(第九十二段)

五 高名の木登り

高名の木登りといひし男、人をおきてて高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えし程はいふこともなくて、下るゝときに軒だけばかりになりて、過すな心して下りよ。」と言葉をかけ侍りしを「かばか

聖人の戒にかなへり
「君子安ケレド危キヲ忘レズ」一治ニキテ亂ヲ忘レズ」の類

時頼

北條時頼、鎌倉五代の執權、弘長三年(元三三)卒、年三十七。

守

相模守時頼をさす。

入れ申す

城介義景

秋田城の介安達義景、秋田城の介は出羽國秋田城を管する役。

けいめい(經營)

りになりては、飛び下るとも下りなん。いかにかくいふぞ。」と申し侍りしかば、その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず、過は安き處になりて必ず仕る事に候。」といふ。あやしき下藤くだらふなれども、聖人の戒にかなへり。鞫も難き所を蹴出して後易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

(第九九段)

六 相模守時頼の母

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありけるに、煤けたる明障子あかりかざりのやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切り廻しつゝ、張られければ、せうとの城介義景じやうのすけ、其の日のけいめいして候ひけるが「給はりてなにがし男おとこにはらせ候はん。さやうの事に心得たる者に候。」と申されければ、其の男、

た易し
さわくと

聖人の心
子曰ク約ヲ以テ之ヲ
失フ者ハスケナシ
(論語里仁篇)

出雲
丹波國桑田郡に出雲
神社がある。
大社
出雲國杵築大社、大
國主命を祀る
する所

尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつはられけるを、義景「みなを張りかへ候はんは、遙にた易く候べし。まだらに候も見苦しくや。」と、重ねて申されければ、尼も後はさわくと張りかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと、若き人に見ならはせて心づけん爲なり。」と、申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を子に持たれける、まことにただ人にはあらざりけりとぞ。

(第百八十四段)

七 丹波に出雲といふ所あり

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたく造れり。志太のなにがしとかや、する所なれば、秋のころ、聖海上人その外

をがむ
かいもちひ

あなめでたや

ことなりけり
つと

ゆかしがり
物識りぬべき顔
習あること

さがなし
いたづらになりにけり

徒然草
僧兼好の隨筆。
兼好、卜部兼好、京
都の人、正中元年(元
八)出家、觀應元年(三
〇)歿、年六十八

も人数多さをひて、「いざ給へ、出雲をがみに。かいもちひ召させん。」とて、具しもて行きたるに、おのゝ拜みてゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子、狛犬背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、この獅子の立ちやういとめづらし。深きゆるあらん。」と、涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは、御覽じとがめずや、無下なり。」といへば、おのゝあやしみて、「まことに他にことなりけり。都のつとに語らん。」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物識りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、さだめて習あることに侍らん。ちと承らばや。」と、いはれければ、「そのことに候。さがなきわらはべども、もの仕りける、奇怪に候ふ事なり。」とて、さし寄りて据ゑ直していなければ、上人の感涙いたづらになりにけり。(第百三十六段)

(徒然草)

口繪参照

幸田露伴
名は成行、東京市の
人、慶應三年生、文
學者、文學博士。

一九雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も天より降るものの面白からぬは
なき中に、雪は又特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色
の雲の天空を蓋ひて、風無き寒さに雀ふくらむ程は、ともあれ、か
くもあれ、そと下す風に連れて、ちら／＼と降り出づる始めより、
檐の玉水日に耀ふ光、長閑に融けつくす終りまで、いづれかをか
しからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、櫻の
葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返しなどしつゝ、さら／＼
と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大き
く軽らかに降りて、落つる間も無く、色なき水の昔にかへる、淡々
しさも懐かしく、消ゆる／＼も少しは積もりて、茅葺の屋根に鹿

冴ゆ。

「冬の雪」

まだし

霏々紛々

縹渺

瓊瑤

「降る最中の雪の美」

子斑の夏の富士を見せ、松梅椈などの梢には、天華俄に落ちか
かるかと疑はしむるも趣あり。

されど降る最中の雪を見て美しきは、冬の末かけて春の初め
の頃、陽氣既に動きて陰氣なほいと盛なる時のことなり。寒さ
甚しからねば、雪細かならず、暖さまだしければ、雪は水めかずし
て恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降る
べき折なれば、其の霏々紛々として盛に降るに當つては、櫻花の
春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對
岸を虚無に封じて、仙境の縹渺をあざむき、半衢の陋街には、連屋
を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨をうたがはしむ。鶴毛亂れ飛び鷺
毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には、廣き所よりも狭き所好し。玉屑珠塵
いと清き事は清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、

「降る時の眺は廣
より狭いのがよい」

渣滓

馬をさへ
馬をさへ眺むる雪の
あしたかな(芭蕉)

降りしきる最中は、遠きは見えずして、廣きは却つて狭くなり、近きは聊か霞みて、狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪よろしく、廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひつくして境新たに、明らかなる空の蒼々と朗らかなるが下に、渣滓錬り去つて銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日は只裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の、取り所なきだに面白く思はる。馬をさへ眺むると人のいひたる旦、朝日の光いとはなやかなるに、疎林の禽



雪の金剛寺

「雪晴の美しさ」

金閣

京都市上京區金閣寺町、鹿苑寺の中にある、應永四年(1357)足利義満の建立。

銀閣

京都市左京區、慈照寺の中にある、文明十一年(1475)足利義政の建立。

眞如堂

天台宗、京都市左京區吉田町にある。

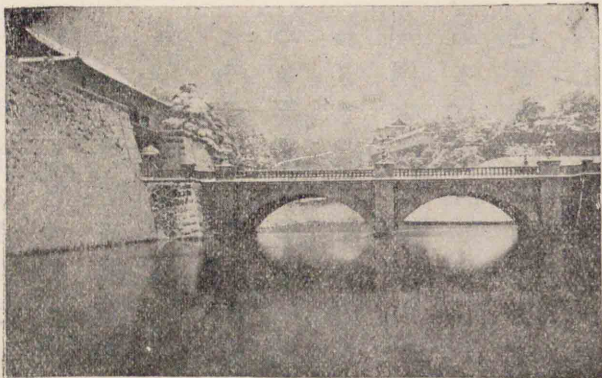
梅尾 槇尾

共に京都の紅葉の名所。
知らぬぞ口惜しき
鬼斧

「西の京の雪」

山王臺

麴町區、日枝神社のある處。



雪の宮城

起つて飛んでまた還る、ありふれたる郊外のさまながらもよし。

西の京は金閣銀閣眞如堂岡崎東山、清水みな晝とすべし。梅尾槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷やかに、時ち、潭は藍靛を湛へて、一脈徐に流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢おもく、壁の簷を戴ける松のむら立つあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山禽の餓に鳴きたるなんと、二十年の昔の、今の胸に猶あざやかなる心地す。

東の京は御濠の水穏やかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪に閉しづなる大御代の午、又類なくめでたし。山

不忍の池
下谷區、上野公園に隣接してゐる。
一望千頃

ありとやいふべき

待乳山
隅田川の右岸、淺草公園に近い小丘。

相生橋

京橋區の新佃島から深川區の越中島へかけた橋。

中島

越中島的一名

此處をこそ……すべけれ

「東の京の雪」

王臺今猶好からんが、溜池のありし昔徒に懐かし。不忍の池の一望千頃の景はいはずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて、湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨てがたき風情あり。暮れて猶暮れがたき雪の暗夜に、何をかものいふ鴨のさゞめきを聞きたる、水に色なく、聲に白さありとやいふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野をわきて流るゝ川なりといふべし。

相生橋の橋長く、中島の島の小なる、取り出でて言ふべきにはあらねど、南に涯なき海をすかして、海鷗も雪に曇る渺々たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて、一幅の畫となしたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

(洗心録)

長塚節

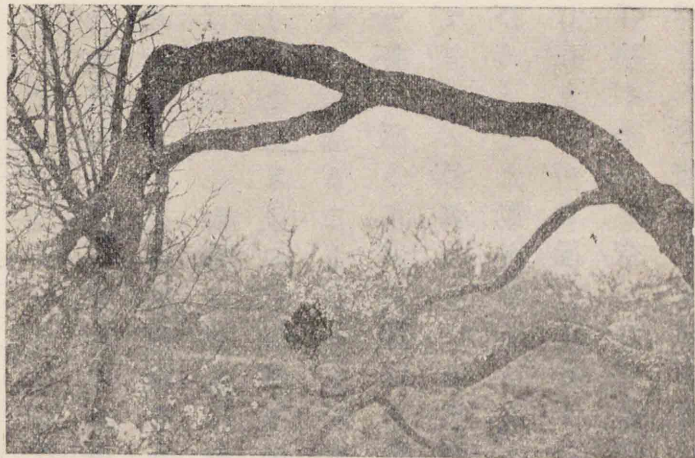
茨城縣の人、小説家、歌人、大正四年歿年三十七。

綿のやうな浴びよう。

二〇 土

長塚節

春は空から、さうして土から微に動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風が、どうかすると、はたと止つて、空際には、ふはふはとした綿のやうな白い雲が、ぼつかりと暖い日光を浴びようとして、僅に立ち騰つたといふやうに、動きもしないで凝然として居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ一杯に吸うて、其の勢づいた土の微な刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木、の地味な蕾は、目に立たぬ間に、少しづつ伸びて、ひら／＼と動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでも、く／＼と鳴き出す事がある。空から射す日の光は、そろ／＼と熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止めぬ。土はすべてをだん／＼と刺



春
 戦して、堀の邊には蘆やとだしば
 や其の他の草が空と相映じて、す
 つきりと其の首を擡げる。軟ら
 かに満たされた空気を更に鈍
 くする様に、榛の木の花はひらひ
 らと止まず動きながら、煤のやう
 な花粉を撒き散らしてゐる。蛙
 は假死の状態から離れて、軟らか
 な草の上に手を突いては、驚いた
 様な様子をして空を仰いで見る。
 さうして、彼等は慌てたやうに聲
 を放つて、其の長い睡眠から復活
 したことを空に向つて告げる。

それで、遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は只空にのみ響いて快
 げである。

彼等は、更に、春の到つたことを一切の生物に向つて知らず。
 草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ないうち
 は、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木はとうに花を
 捨てて、自分が先に嫩葉の姿になつて見せる。黄色味を含んだ
 嫩葉が、爽やかで且朗らかな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、
 蒼い空の下に、まだ猶豫うて居る周囲の林を見る。岬の様な形
 に優うて居る水田を抱へて、周囲の林は、漸く其の本性のまにま
 に勝手に白つぼいのが、赤つぼいのが、黄色つぼいのが、種々に茂
 つて、それが氣が付いた時に急いで一つの深い緑になるのである。
 雑木林の其處ら此處らに散在してゐる開墾地の麥も、すつ
 と首を出して、蠶豆の花も、可憐な黒い瞳を聚めて羞づかしさう

たゆたふ

堪へ絶え。

に葉の間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求め、雲雀が時々空を占めて春が闌けたと喚びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛び越え飛び越え鳴き立てるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、之を仰げば眩しさに堪へぬやうに、其の身を遙に煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉のちぎれる迄は劇しく鳴らさうとするのである。蛙はいよゝゝ益鳴き矜つて、樫の木のような大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

此の時、すべての樹木や、夫から冬季の間にはぐつたりと地に附いて居たすべての雑草が爪立ちして、只空へゝと暖かな光

を求めて止まぬ。土がそれを凝然とひき留めて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と並行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身をゆるがしながら殊更に鳴きたてる。白い絛絲のやうな雨は、水が田に満つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返しゝ働いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせゝと促して止まぬ。蛙がびたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。さうして蛙は、ひつそりと静な夜になると、如何にも自分の聲が遠くかつ遙に響くかを矜るものの如

く、力を極めて鳴く。雨戸を閉づる時、蛙の聲はめつきり遠く隔たつて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に疲労を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、布団を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に逼る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚び返すのである。草木は遠く遙に響けと鳴く、其の聲に撼られつゝ、夜の間、成長する。櫟や檜や其の他の雑木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうして、それが鳴き止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しとくと屢梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて、爽やかな涼しい蔭を作るのである。

（ 土 ）

二二 千曲川旅情の歌

島崎 藤村

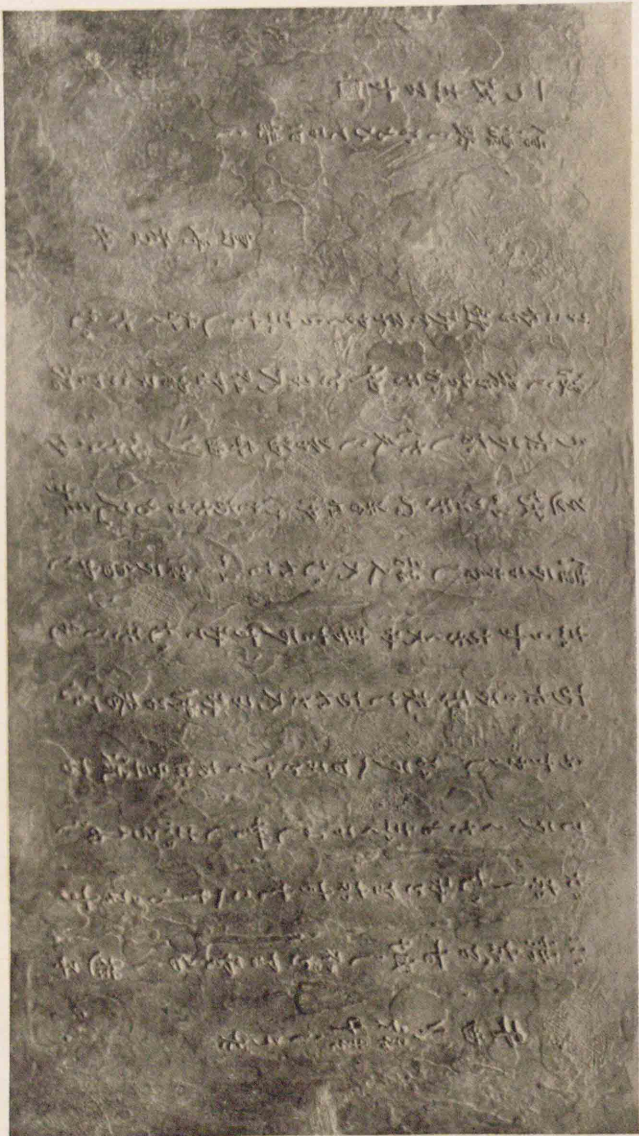
小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
 雲白く遊子悲しむ。
 緑なす藜藿は崩えず
 若草も藉くによしなし。
 しろがねの衾の岡邊
 日に溶けて淡雪流る。
 あたゝかき光はあれど
 野に満つる香も知らず、

浅くのみ春は霞みて
麥の色はつかに青し。
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ。

暮れ行けば浅間も見えず、
歌哀し佐久の草笛。
千曲川いさよふ波の
岸近き宿にのぼりつ。
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。

(落梅集)



藤村詩碑

藤村詩碑畔より千曲川を望む



千曲川のほとりにて

昨日またかくてありけり、
今日もまたかくてありなむ。
この命なあせにせきを齧齧
明日をのみ思ひわづらふ。
いくたびか榮枯の夢の
消え残る谷に下りて、
河波のいさよふ見れば
砂まじりの水巻き返る。

嗚呼古城なにをか語り、
岸の波なにをか答ふ。
いにし世を静に思へ、
百年もきのふのごとし。

千曲川柳霞みて

春浅く水流れたり。

たゞひとり岩をめぐりて

この岸に愁を繋ぐ。

(落梅集)

二 二 夜 又 王

岡 本 綺 堂

岡本綺堂

名は敬二、東京市の人、明治五年生、劇作家。

頼家

源頼朝の子、建仁三年(一一六三)歿、年二十三。

修禪寺

一名桂谷山寺眞言宗。

登場人物

面教師 夜叉王

源左金吾頼家

夜叉王娘 桂

下田五郎景安

同 楓

修禪寺の僧

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門外には柳の大樹、其の後ろは畑を隔てて塔の峰つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾がみすたれを下せり。庭前には秋草の花咲きたり。楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(二十三歳)後ろより下田五郎景安十七八歳頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これ〱、將軍家の御みこ微行しほびぢや、疎忽そごつがあつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉 思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませんが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜叉 して御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に

丹精を凝らす

残さんと、曩に其の方を召し出し、頼家に似せたる面おもてを作れと、繪姿までも遣はしておいたるに、日を経れども出來せず、幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎 多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初め、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家 予は生まれ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。

仔細をいへ。仔細を申せ。

夜叉 御立腹恐れ入りました。ござります。勿體なくも、征夷大將

齒痒う。

軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いか
てか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年未熟ながら
も腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のも
の一箇も無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延
引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家え、催促の都度と同じ事を……。其の申譯は聞き飽いた
ぞ。

五郎 此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までに
は必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

夜又 其の期日は申し上げられません。左に鑿を持ち右に槌を
持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組
む番匠などとは事變りて、これは、生無き粗木を削り、男女夫
人、夜又、羅刹ありとあらゆる善惡、邪正の魂魄を打ち込む面作

夜
羅刹又

冥
利

師 五體にみなざる精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は
流るゝごとく彼に通ひて、始めて面も作れます。たゞし、其
の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、われなが
ら確とはわかりません。

僧 これ、夜又王殿。上様御自身も仰せらるゝ如く、至つて
御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬ
らりくらりと取り止の無い事申し上げたら、御疳癖が愈、募ら
う程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御
返事を申すがよからう。

夜又 ぢやというても出來ぬものはなう。

僧 何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある
中で、伊豆の夜又王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……
夜又 さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜又王

といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは、如何にも無念ぢや。頼家何、無念ぢやと……さらば如何なる祟を受けうとも早急には出来ぬといふか。

夜又恐れながら早急には……

頼家む、おのれ覺悟せい。

疍癖募りし頼家は、五郎の捧げた太刀引取つてあはや抜かんとす。

奥より桂走り出で、

桂 まあ〜お待ち下さりませ。

頼家 え、退け〜。

桂 先づお鎖まり下さりませ。面は唯今献上いたします。なう父様。

と顧みれども、夜又王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出来して居るか。

頼家 え、おのれ前後不揃のことを申し立てて、予をあざむかうでな。

桂 いえ〜、嘘偽ではござりません。面は確に出来して居ります。これ父様もう此の上は是非がござんすまい。

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面を、寧ろ献上なされては……

僧 それがい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜又 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。黙つておるやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御其の面を持つ

て来て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う〜。

楓 あい〜。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂受け取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて少しく解けたる體なり。

桂 嘘偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげて、

頼家 おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様御顔に生き寫しぢや。

頼家 む〜。

と飽かず打まもる。僧はしたり顔に、

僧 さればこそいはぬ事か。それ程の物が出来してゐながら、とかう濫つて居られたは、夜又王殿も氣の知れぬ男ぢや。はは〜。

鑑識

夜又王、容を改めて、

夜又 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じました。が、斯う相成つては致し方もござりません。方々には其の面を何と御覽なされます。

頼家 さすがは夜又王、天晴のものぢや。頼家も満足したぞ。

夜又 天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識違ひ。それは夜又王が一生の不出来。よう御覽じませ。面は死んで居ります。

五郎 面が死んで居るとは……。

夜又 年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打ち直しても生きたる色なく、魂魄も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりません。死人の面でござります。五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人

怨靈

の面……。死人の相とは相見えぬがなう。
夜又 いや、どう見直しても生ある人ではござりません。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪異などの類……。

僧 あ、これ、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有り難く御禮を申されい。

頼家 む、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜又 たつて御所望とござりますれば……。

頼家 お、所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。

桂箱を捧げて庭におり立つ。

僧 やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜又王殿、明日

又逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く。

頼家 お、何時の間にか暗うなつた。

僧 進み出でて桂に雪洞を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。夜又王はちつと思案の體なり。

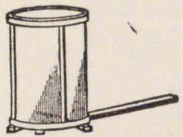
楓 父様、お見送りを……。

夜又王 始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜又王起ち上つて霎時默然として沈思し、あたりしが、やがてつか／＼と縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取り下げ、あはや打碎かんとす。楓は驚き取絶りて、

楓 あ、これ、何となさる。お前は物に狂はれたか。



雪洞

霎時

夜又切羽詰りて是非に及ばず拙き細工を献上したは悔んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りてこれぞ伊豆の住人夜又王が作と寶物帳にも記されて百千年の後までも笑を貽さば一生の名折れ末代の恥辱。所詮夜又王の名は廢つた。職人も今日限り再び槌は持つまいぞ。

楓 さりと短氣でござりませう。如何なる名人上手でも細工の出来不出来は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出来ようならばそれが即ち名人ではござりませんか。

夜又む。

楓 拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから愈精出して世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下りませ。

と絶りて泣く。夜又王答へず、思案の眼を瞑ぢたり。(夜又王)

菊池 寛

高松の人、明治二十二年生、小説家。

俊 寛

法性寺の執行、藤原成親等と平氏を滅ぼさんことを謀り、事顯れて東界島に流され、治承二年(一一三二)配所で歿した。

昏 倒

二三 俊 寛

寛

菊

池

寛

船は俊寛の苦悶などには何の容赦もなく、半刻も経たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に紛れ込んで了つた。船の姿を見失うた時、俊寛は絶望の爲に昏倒した。昨夜來叫び續けた疲勞が一時に發したのだらう、其のまゝ、ぼうつとして眠り續けた。彼は巖壁の上で昏倒したまゝ、何時間眠つてゐたかは自分にも分らなかつた。一度目覺めた時は夜だつた。彼は自分の頭の上の大空が大半暗い雲に掩はれ、其の僅な切目から二三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渴かわきと全身を碎くやうな疼痛を感じた。彼は水を飲みたいと思ひながら周圍を見廻した。が、巖壁の背後はすぐ礮确な山になつて居るらしく、小川とか泉とかがありさうにも思へなかつた。それでも烈しい渴は、

礮 确

榕樹



彼を一刻もぢつとしてはゐさせなかつた。彼は寝てゐた岩から身を剝がすやうにしてたち上つた。たち上る時體の諸の關節が音を立てて軋るやうに思はれた。彼はそれでも這ふやうにして巖壁を下りることが出來た。彼は晝間——それは昨日であつたか一昨日であつたか分らなかつたが——夢中で走つた道を二町ばかり引返した。彼は晝間其處を走つた時榕樹が五六本生えてゐて、其の根に危く躓きさうになつたのを覺えてゐた。彼の濁つて了つて居る頭の中にも、榕樹の周圍を探せば水があるかも知れないと言ふ考がぼんやり浮んでゐた。

彼は、榕樹の生えて居る周圍を海の水明りて二三度探し廻つて見たけれども、其處には一面に唐竹が密生して居るだけで、水らしいものは少しも見當らなかつた。彼は其の搜索に残つてゐた精力を使ひ盡くして、崩れるやうに地上へ横たはると、再び

信天翁



成經

大納言藤原成親の子
治承元年(一一三三)父の
事に坐して俊寛と共に
鬼界島に流された、
建仁二年(一一六三)歿。

康頼

平康頼、成親・俊寛等
と平氏討滅を謀り、
鬼界島に流された。

視野

昏々として眠り始めた。

彼が二度目に目を覺ました時、それは朝だつた。疲れ菱びて居る彼の頬にも、朝の微風が快かつた。彼が目を開くと、自分の體の上に茂り重なつて居る蒼々とした榕樹の梢を洩れる清々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて自分の體に注いで居るのを見た。流石に暫くの間は淨らかな氣持がした。が、すぐ二三日來の出來事が悪夢のやうに歸つて來、そして、烈しい渴を感じたので、彼はよろ／＼とたち上つた。それでも、縹渺と無邊際に擴がつて居る海を、未練にももう一度見直さずには居られなかつた。が、群青色に遙々と續いて居る大洋の上には、信天翁の一群が飛び交うて居る外は何物も見えなかつた。成經や康頼を乗せた船が、今まで視野の中に止まつて居る筈はなかつた。彼が再び地上に身を投げた時、身を焼くやうな渴と餓とが烈

瞋
恚

しく身に迫つて来た。彼は赦免の船が来て以来、何も食べてゐないのだつた。基康は流石に彼を憐がつて、船の中で炊いた飯を持つて来て呉れたのだつたが、瞋恚の火に心を焦がしてゐた俊寛は、其の久しぶりの珍味にも目をくれないで、水夫の手からそれを地上にたゞき落した。無論、今でも自分の小屋まで歸れば、乾飯も澤山残つて居る。が、彼には一里に近い道を歩く勇氣などは残つてゐなかつた。

烈しい渴と餓とは彼の心を荒ませて、自殺の心を起させた。彼は目の前の海に身を投げることを考へた。そして、何故基康の船が居る中に死ななかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成経、康頼の目の前で死んだならば、少しは腹いせにもなつたのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうと言ふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に斷たれなが

ら暮らして行くことは彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向うの岸に一つの岩があり、其の下の水が殊更に深いやうに見えた。

彼が決心をしてたち上つた時、彼はふと水の匂を嗅いだ。それは眞水の匂だつた。極度に渴して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は水の匂を嗅ぐと、其の方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を彼は獸の様に潛つた。十間許り潛つた時、其の林が盡きて、其處から岩山が聳えてゐた。彼はふと、其處に大きい岩を背後にして、此の島には珍らしい椰子の木が十本許り生えて居るのを見た。そして、其の椰子に掩はれた鳶色の岩から、一條の水が銀の絲の様に滴つて、それが椰子の根元で小さい泉になつて居るのを見た。水は浅い乍らに澄みきつてゐて、沈んで居る木の葉さへ一々に數へられた。

鹿が谷 京都東山の地名、如意岳の西麓にある。俊寛の山荘のあつた所。
清盛 平清盛。

丹波少將 成經を指す。
平判官 康頼を指す。
丹左衛門尉 藤原基康、高倉天皇に仕へて左衛門尉となる、鬼界島へ赦免の使となつて行つた。

渴し切つて居る彼は犬のやうにつくばつて、其の冷たい水を思ひ切りがぶくと飲んだ。それが何といふ快さだつたらう。それは彼が鹿が谷の山荘で飲んだ如何なる美酒にも勝つてゐた。彼は其の清冽な水を味はつて居る間は、清盛に對する怨も、島に只一人残された悲しみも、忘れ果てたやうに、清々しい氣持でゐた。彼は蘇つたやうな氣持になつてたち上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實が二つばかり生つて居るのを見た。彼は疲労を忘れて猿のやうに攀ぢ登つた。それを叩き落とすと、傍の岩で打碎き、思ふさま貪り食つた。

彼は生まれて以來、是程の有難さと是程の甘さとで飲食したことはなかつた。彼は椰子の實の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。清盛平家の一門、丹波少將平判官丹左衛門尉、そんな名前や、そんな名前

に對する自分の感情が、此の口の中の總べてを、否、心の中の總べてを溶かして了ふやうな木の實の味に比べて、全く空虚な、つまらないもののやうな氣がし始めた。

彼は口の中に残る快い感覺を楽しみながら、泉の畔の青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活の色々な相を心の中に想ひ出して見た。都に於ける種々の暗闘、陷擠、戰爭、權勢の爭奪、それから來る嫉妬、反感、憎惡、さう言ふ感情の動くまゝに狂奔してゐた自分の浅ましさが、しみくと解つたやうな氣がした。船を追つて狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうに浅ましい氣がした。煩惱を起す種のない此の絶海の孤島こそ、自分に取つて唯一の淨土ではあるまいか。康頼や成經が傍にゐた爲に、都の生活に對する、否、人生に對する執著が切れなかつたのだ。此の島を假の住處と思へばこそ、硫黄が岳に立つ煙さへ焦熱地獄

反感
煩惱
焦熱地獄

眞如の生活

に續くもののやうに懶く思はれたのだ。此處こそつひの住處だ、あらゆる煩惱と執著とを斷つて眞如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、彼は生まれ變つたやうな朗らかな氣持がした。彼はふと寢返りを打つと、すぐ自分の鼻先に、撫子に似た眞赤な花が咲いて居るのを見た。それは都人の彼には名も知れない花だつた。が、其の花の眞紅の花瓣が何と言ふ美しさと淨らかさを持つてゐたことだらう。其の花をぢつと見詰めて居ると、人間のすべてから知られないで美しく薫つて居る、かうした名も知れない花の生活と言つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへ、むげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は自殺しようとした自分の心の淺はかさを恥ぢた。彼の心には今新しい力が湧いた。彼は踴躍してたち上つた。そして、海岸へ走り出た。平素は魂

踴躍

も眩むやうに懶く思はれた大洋が、如何に美しく輝いてゐたことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が後から後からと湧くやうに躍つてゐた。海に接して居る砂濱は金色に輝き、飛び交うて居る信天翁の翼からは、銀の光を發するかと思はれ、平素は見ることを厭つてゐた硫黄が岳に立つ煙さへ、すみ渡つた朝空に琥珀色に優にやさしくたなびいてゐた。彼は童のやうに伸びやかな心になりながら、兩手を差擴げ、童のやうに叫びながら、自分の小屋へ馳せ戻つた。

島に來て以來一年の間、彼の生活は、成經や康頼と昔物語から謀反の話をして、おしまひにはお互の境遇を歎き合ふか、てなれば、砂丘の上などに登りながら、浪路遙な都を偲んで溜息を吐きながら、一日を茫然と過ごして了ふのだつたが、彼はさうした生活を根本から改めようと決心した。

(俊 寛)

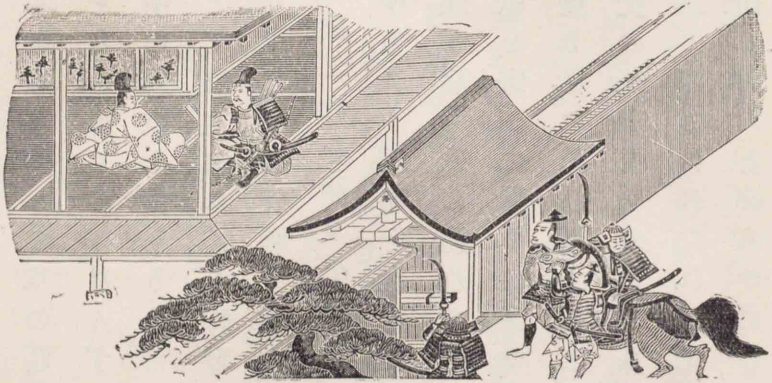
二四 忠 度 都 落

薩摩守忠度
平忠盛の子、俊成の
門人、壽永三年(八四四)
一の谷戦に歿、年四
十一。

藤原俊成
俊忠の子、歌人、元
久元年(二六四)歿、年九
十一。
歸られたりけん

薩摩守忠度は、何處よりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、わが
身ともにひた兜七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはし
て見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名告り給へば、「落人
還り來れり。」とて、その内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛ん
で下り、自ら高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべきこ
とありて忠度が参りて候。假令門をば開けられずとも、この際
まで立寄りたまへ。」と申されければ、俊成卿「その人ならばくる
しかるまじ。開けて入れ申せ。」とて、門を開けて對面ありけり。
事の體、何となく物あはれなり。薩摩守申されけるは、「先年申し
承りてより後は、ゆめ／＼疎略を存ぜずとは申しながら、この二
三箇年は、京都の騒、國々の亂出で來剩へ當家の身の上に罷り成

撰
集



俊 成 ・ 忠 度 の 對 面

りて候へば、常に参り寄ること
も候はず。君既に帝都を出て
させ給ひぬ。一門の運命、今日
早盡きはて候。それに就き候
うては、撰集の御沙汰あるべき
由承りて候ひし程に、生涯の面
目に一首なりとも、御恩を蒙ら
むと存じ候ひつるにかゝる世
の亂出で來て、その沙汰なく候
條、たゞ一身の歎と存じ候。こ
の後世靜まつて、撰集の御沙汰
候はば、これに候ふ卷物の中に、
さりぬべき歌候はば、一首なり

とこそ……すれ

とも御恩を蒙りて、草の蔭にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなり参らせ候はんずれ。」とて、日來詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける巻物を、今はとて打立たれける時、取りて持たれけるを、鎧の引合はせより取り出でて、俊成卿に奉らる。

三位、これを開きて見給ひて、かゝる忘形見どもを賜はり候上は、ゆめ／＼疎略を存ずまじう候。さても唯今の御渡りこそ、情も深う、哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へ。」と宣へば、薩摩守、骸を野山に曝さば、曝せ、憂き名を西海の波に流さば流せ。今は憂き世に思ひ置くことなし。さらば暇申す。」とて、馬に打乗り、兜の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後ろを遙に見送りて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、「前途程遠、馳思、於雁山、夕、雲。」と高らかに口吟み給へば、俊成卿も、いと哀に覺え

前途程遠し
大江朝綱が、渤海の使に贈った詩句。

千載集

二十卷、文治三年（1113）後白河法皇の院宣を奉じて俊成が撰した和歌集

勅勘

て、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世静まりて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひ置きし言の葉、今更思ひ出でて哀なりければ、件の巻物の中に、さりぬべき歌幾らもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字をば顯されず、故郷花」といふ題にて詠まれたりける歌一首をぞ、「讀人知らず」とて入れられたる。

さゞなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくらかな

その身、朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。

（平家物語 卷七、忠度の都落の事）

曹操

字は孟德、魏の武帝、漢の建安二十五年(西暦三〇)歿、年六十

月明らかに

月明ラカニ星稀ニ鳥

鵲南ニ飛ブ。曹操

(短歌行)

フレデリック大王

(西暦一三三二一五六)

サンニスシー宮

ベルリンの近郊ポツ

ダムに在る。

景慕

文學の嗜のある偉人は一入懐かしい

源頼光・頼信

共に満仲の子。

二五 文學と氣品

芳賀 矢一

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜のある偉人は、一入懐かしい心持がする。魏の曹操はその事功の上から見れば、餘り好かれぬ人物であるが、槊を横たへて、月明らかに星稀に。」と、歌つた一事を思ひ出すと、何となく慕はしくなつて来る。プロシヤのフレデリック大王は賢君として名高いが、そのサンニスシー宮中に佛國の文豪と交はつて、文學に耽つたことを考へると、なほ更貴い感じを起す。英雄閑日月ありといふ語がしみぐと身に染みて、景慕の念を生ずる。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるの

しひを拾ひて

登るべき便なき身は

木の下にしひを拾

ひて世を渡るかな。

(歴史家集)

弓張月

時鳥名をも雲居にあ

ぐるかな、弓張月の

いるに任せて。(同上)

埋木の

埋木の花さくことも

なかりしに、みのな

る果ぞあはれなりけ

る。(同上)

韻事

かりの契を

とても世にながらふ

べくもあらぬ身の、

かりのちぎりをいか

で結ばん。

梓弓

歸らしとかねて思へ

ば梓弓、なき數にい

る名をぞといむる。

波ばかりこそ

有明の月もあかしの

浦風に、波ばかりこ

そよると見えしか。

(金葉集)

陸奥のいはでしのぶ

は、えぞ知らぬ、書き

つくしてよ壺のいし

ぶみ。(新古今集)

は、勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな。」と、詠んだ風流衣川に矢を番つて、衣のたてはほころびにけり。」と呼び止めた情致がある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな。」は餘り感心せぬが、弓張月のいるに任せて。「埋木の花さくこともなかりしに。」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、「かりの契をいかで結ばん。」の歌と、「梓弓なき數にいる。」の辭世である。平忠盛に「波ばかりこそよると見えしか。」の風流があつて、眇の俄殿上人も、優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ。」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流譚が交じつてゐた

らうと想像せられる。

その子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大な發達を遂げてゐる。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流譚のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗り返して、俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武

「風流は人品を高める」

北條氏康

氏綱の子、小田原城に據り關東八州を風靡す、元龜元年(三三三)歿、年五十七。

毛利元就

大江弘元の第三子、安藝の豪雄、元龜二年(三三三)歿、年七十五。

霜滿軍營

霜ハ軍營ニ滿チ秋氣清シ、數行ノ過雁月三更、越山併セ得タリ能州ノ景、サモアラバアレ家郷ノ遠征ヲ憶フハ。

襟度

直江兼續

越後の人、山城守と稱する、元和五年(三三九)歿、年六十。想望す

田氏、北條氏、長曾我部氏等の家訓は皆これを歌つてゐる。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を讀みうる人がなかつたなどといふのは、ほんたうの武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をもものしてゐる。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙に武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。

多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足らない心地がする。

「武士と文學」

梅田雲濱 若狭の人、尊王攘夷論者、安政六年(三五九)獄死、年四十四。
 橋本景岳 越前の人、幕末の志士、名は綱紀、通稱左内、安政六年(三五九)歿、年二十六。
 頼三樹三郎 名は醇、號は古狂生、幕末の志士、安政六年(三五九)歿、年二十五。
 佐久間象山 名は啓、通稱啓之助、開港論者、安政三年(三五七)歿、年五十四。
 吉田松陰 杉寅次郎、號は二十一回猛士、長門萩の藩士、安政六年(三五九)歿、年二十九。
 僧月照 名は忍向、京都清水寺成就院の僧、西郷隆盛と親交があつた、安政五年(三五八)隆盛と共に投身した、年四十六。

梶原景時・明智光秀の、時にとつての連歌などが、やゝその憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

三決死矣而不死二十五回

幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌など

渡刀水五七閑地不得閑三

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

十九年七處徙邦家陸替非

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

偶然人生得失豈徒爾自驚

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

塵垢盈皮膚猶餘忠義填骨

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

飄飄然之遠不可期丘明馬

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

遷空自念苟明大義正人心

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

皇道憂患不興起斯心奮發

藤田東湖の回天詩や正氣歌など

述懐

藤田彪武卿題

れないやうになつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公と

伴林光平

攝津の人、幕末の志士、文久三年(三五三)歿、年五十二。

望東尼

本名は野村もと、幕末の勤王家、慶應三年(三五七)歿、年六十二。

千秋萬古

「千秋萬古人の情緒を動かす」

披瀝

「文學に心掛けるほどの襟度がなければならぬ」

なり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の和歌を留めて、國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より和歌のみに限らぬ。しかし日本では文學の他の方面は、從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐露したり、理想を披瀝したりすることはなかつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名を残さうと思ふ人は、文學に筆を染めることを心掛けるがよい。否々、平生から文學に心掛けるほどの襟度の人であつて、始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。

生きとし生けるもの
人は萬物の靈
書經の泰誓にある語。

朽ちなんこそ……
なけれ
顔之推
字は子介、支那隋代
の學者。
人身は得難し
人身ハ得難シ、空シ
ク過ゴスコト勿レ。
(顔氏家訓)

二六人の道

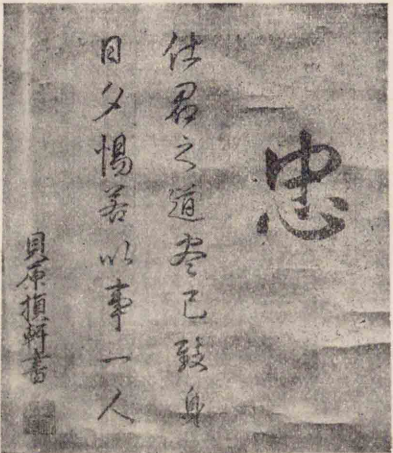
天地の恵をうけて、生きとし生けるもろくきあまりなき中
に、人ばかり貴きものなし。如何にとならば、人は萬物の靈なれ
ばなり。さればかく人と生まれ來ぬること、至りて得難き幸な
り。然るに、我が輩愚にして人の道を知らざれば、天地より生ま
れ得たる人の心を失ひ、人の行くべき道をば行かで、行くまじき
道に迷ひ、朝夕心を苦しめ、その上我が身に私して人に情なく、慮
無くて人の憂を知らず。至りて近き父母に事へてだにその心
にかなはず。凡そ其の人倫に交はりて道を失ひ、人と生まれた
る貴き身を徒になし、鳥獸と同じく生き、草木と共に朽ちなんこ
そ本意なけれ。顔之推が、人身は得難し、空しく過ごすことなか
れ。」といひけんこと、心に留むべし。この故に、人は幼より古の

貝原益軒筆

忠
仕君之道盡己致身
日夕惕若以事一人
貝原損軒書

行はんこそ……
恨なかるべけれ

益軒十訓
貝原益軒の教訓書、
貝原益軒一名は篤信
筑前の人、徳川中世
の儒者、正徳四年(三三
七)歿、年八十五。



貝原益軒筆

聖の道を學び、我が心に天地より生まれ得たる仁を行ひて自ら
樂しみ、人に仁を施して樂しましむべし。仁とは何ぞや。あは
れみの心を本として行ひ出せる
諸の善をすべて仁といふ。仁と
は善の總名なり。仁を行ふはこ
れ天地の御心に從へるなり。是
即ち古の聖人の教へ行ふ人の道
なり。この道に従ひて、自ら樂し
み人を樂しましめて人の道を行
はんこそ、人と生まれたるかひありて、顔之推が言ひけん空しく
過ごすの恨なかるべけれ。

(益軒十訓 卷之上)

五十嵐力
米澤市の人、明治七
年生、文學博士、早稲
田大學教授。
文武天皇
第四十二代。

日本書紀
三十卷、神武以降持
統天皇の御代までの
事蹟を漢文で記した
歴史書。

二七 明 淨 直 五十嵐 力

文武天皇が、御即位の際に下された宣命の中に、「明き淨き直き誠の心」といふ詞がある。我等はこの「明き淨き直き心」が、日本人の性質の核となり、中心となるものであると考へる。この詞は、代々の詔勅に幾度も繰り返されてゐる。しかも重きを置いて繰り返されてゐる。その他、古事記・日本書紀・萬葉集などに於ても、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは、畢竟我等の祖先が心の中に深く感じたこと、大和民族に最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢々發したのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱される現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅などの諸性質は、概ねこの明・淨・直の三大性質を基本として説明されるらしく、殊に三種の神器がこの三大

抽象的

透徹

性質の標章として遺憾がないやうに思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を説明しよう。

鏡の性は明で、その徳は玲瓏透徹に物を映ずることである。日本人は、鏡のやうな明き心で正しく事物を觀た。故に、その觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は、鏡を齎して、我が大御前を見るが如くせよ。」と仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齎かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに、明き心といふ語が澤山用ひられてゐる。此等は、いづれも、この性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治・社會・宗教などの諸方面

騎虎の勢

調停

に互つて、諸外國に見るやうな非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、またいつもそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがて、お互にそれには道理も無理もある事を解すると、馬鹿らしくなつて、最早争論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騒亂で、明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が、文藝の奨励に骨折るのも、群雄割據の亂世に、陣中篝火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に「敵ぞとて何かは人の憎からん、同じ御國の同じ身なれば」と詠んで、敵を同胞として愛した勇

十字軍
聖地恢復の戦争(西
曆二六二—二九二)
フランス革命
フランス國に起つた
革命戦争(西曆一七九
一—一七九三)

濁 濁

將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見る事が明らかで、理に従ふ事が流れるやうな根本性によるのではあるまいか。大和民族は、十字軍やフランス革命のやうな極端な狂言を演ずるのに、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正といひ、理に鋭いといひ、感情の平靜を保つといひ、何事をも受け入れ、胸懷の洞然たる人種であるといつた外人の批評は、強ち出鱈目の空世辭ではないと思ふ。

清淨の徳は、玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは、似てゐるが同じではない。その違ふ趣は、丁度鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢濁濁を忌むことは、清明共に同様であるが、清はそれ以上に味はひのあり温かみのあることを要する。譬へば、鏡は空白で正しく物を映ずれば足りるが、玉は必ずしも空白

温潤の光
圓融の相
澄徹の趣

て物を映ずる事を要しないで、温潤の光圓融の相澄徹の趣のあることを要する様なものである。本来日本人は、明らかに事物を見る長所を有するばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は、空白の明ではなくて、温潤圓融澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶夜光珠の明である。我が國は、古來、襖・祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞宣命を初めとして、多くの歌詠諷謠は明き心を現しながら、趣味・風韻に富んでゐる。而も、その趣味や形容が、諸外國例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は胃に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の

審美眼

首鼠兩端

民に至るまで、一般にそれに相應しい文字を有つてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬものはなく、そして、これは外國の労働者に絶えて見ないところといはれてゐる。大工指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しくして裏面の粗末なのに反し、我が國のは、見えない裏面にまでも手を盡くすといふ嗜みがある。此等は、何れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は、「日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至る迄、皆美術を愛翫す。」といふた一外國人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふのである。直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。その厭ふところは躊躇緩慢首鼠兩端である、曲ること、拗れること、邪なことである。叢雲の劔は、その標章としてこの上な

父母を云々
父母を、見れば尊し、
妻子見れば、めぐし
うつくし(萬葉集)

海行かば
海行かば、水漬く屍
山行かば、草むす屍
大君の、へにこそ死
なめ、かへり見はせ
じ。(萬葉集)

く相應しい。元來、直の徳の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するのにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見た所を意が直進して實現する。そして、知の見方、意の働き方に、潔くていひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格といふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし。ゆゑに、その明き心の示すところに従ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君、「現つ神として國に臨み給ふ様が限りなく高く貴い。故に、直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公を效くすのである。そして、その君父に事へ妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮、分別利害勘定の結果でなく、眞實掬すべき趣があつた。こゝが、眞淵宣長等の國學者が、感歎し自負して

素盞鳴尊
伊弉諾尊の御子
日本武尊
景行天皇の御子
鎮西八郎爲朝
源爲義の第八子

權 化

措かなかつた點である。無論、何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の性向があつたであらうし、日本民族にも、利害勘定の行爲がなかつたとはいはれないであらう。また、自然眞實の行爲に弊害が伴はないともいはれないであらう。けれども、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存したやうに思はれる。その例は、遠い昔では、素盞鳴尊に見ることが出来る。あの日本武尊も、素盞鳴尊系の勇者である。次いで、鎮西八郎爲朝の腕白勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも素盞鳴尊系の大立者。此等何れも向う見ずの様でありながら、妙に情に厚いところがあり、君父のこととあれば、水も辭せず、直前するといふ風があつた。直斷決勇の權化で、確に大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。その他、蒙古來寇の時に、西海の將士が身命を棄てて防戦した態

千萬の
高橋蟲磨の作。(萬葉集)
畠山重忠
源賴朝の臣。

曾我五郎
名は時政、

朝比奈三郎
名は義秀、和田義盛の子。

豁然大悟

金平淨瑠璃
寛文・延寶の頃、櫻井丹波掾の語り初めた金平(金平本の主人公の名)の武勇を仕組んだ淨瑠璃。

依 怙

利 潤

度を見よ。代々の武士が「千萬の軍なりとも言挙げせず、取りて來ぬべき男とぞ思ふ。」といふ様な斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠や加藤清正の如く、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎朝比奈三郎のやうな一徹者が國民に愛されるのを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたのを見よ。おつと出せばやつと受ける金平淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞偽は知らないが、正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に當る。」といふ戒が、天照大神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすれば收まる。武士は物事手取早くするものぞといふ事が、武士道の金誠になつてゐた。此等は何れも直を好む性質が大和民族の心性の基本、精髓をなしてゐる證據である。

大西祝

岡山縣の人、哲學者、文學博士、前京都帝國大學教授、明治三十二年歿、年三十六。

朝 宗

ユダヤ人
ロシア・ドイツ等に
住む民族。

二八 國民の抱負

大 西 祝

太古は漠たり。史筆以來世界の文明は滔々として進行しつつあるなり。而して世界諸國の歴史の河流は遲速の別こそあれ、遂に世界歴史といふ一大潮流に朝宗する運命を有するもの如し。然れども、世界の文明に力を致すに於て、各國其の趣を異にせざるなし。古昔に於て、ユダヤ人は地上に神の王國を建つるを以て其の覺悟とし、ギリシヤ人は文藝學術を傳播するを以て其の天職とし、ローマは世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受けたる後に於て、なほ世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建て、精神的帝王となりて世界に君臨したり。降つて近世に至り、英人を見るに、彼等は己が運命は海上權を掌握し、遠隔の地に植民をなすにありと

斬新

信じ、米人は其の國土を以て、あらゆる方面に自主自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學及び政治上より世界に一大寄與をなすを以て其の抱負となし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘布するを以て其の任務と信じ居るなり。而して是等諸國民が文明の潮流に力を致す模様を見るに、終始間斷なく力を致す事甚だ稀にして、恰も流星の天に顯れて忽ち滅するが如く、極めて短き時限中に於て、其の國民特有の性質上より斬新なる寄與を爲して、世界の文明を鼓舞し、一たび其の職分を盡くし終れば、其の國は疲勞衰頹して、時機再び到來し、元氣恢復するまでは、永く沈靜の状態に没するもの如し。尤も、一方より見れば、諸國民は間斷なく世界の潮流を潤澤しつゝありといひ得ざるにあらず。されど最も著しく世界の文明を鼓舞し、諸國民注意の焦點となり、世界を震動風靡する國民は、一時代に於ては大抵た

瞠若
旗幟を植つ

「世界文明の寄與者」

だ一あるのみ。ギリシヤの盛なるに當つてや、世界の諸國は睡眠の裡にあり。ローマ起ればギリシヤは既に廢れたり。近世に於て、佛國が驚天動地の活劇を演ずる時は、英獨後へに瞠若として退き、米國が獨立自由の旗幟を植つるに當つては、世界の諸國杳然として爲す所を知らず。かくの如く世界の勢は、同時に各處に發顯するものに非ずして、一定時には一定處を限りて其の集合點となし、此の點に於て爆裂するもの如し。其の爆裂の餘波は數十百年に互ることありと雖も、其の爆裂するは實に一刹那の間にあり。而して破裂の座となりたる國土を以て、世界文明の寄與者たる資格ある者なることを吹聴廣告するなり。余輩近世の歴史を讀んでひそかに思ふ、世界の勢が歐米の土に破裂する時限は最早過ぎ去りつゝあるにあらざるかと。歐米諸洲今日の運動は頗る盛なれど、こは寧ろ過去破裂の餘勢に

蠢動

よりて動くものにして、大勢破裂の中心點は、漸く東方の國土に廻轉しつゝあるにあらざるかと疑ふ。太古に於ては、東洋の國土は實に世界の勢の破裂點となり、世界文明の潮流は其の源を東洋に發したりしなり。東洋の諸國民が世界の活劇を演じ、偉大なる功績を奏したる日に於て、西洋諸國は憐にも暗黒の裏に蠢動したりき。然れども世界大勢の轉ずる所、如何ともすべからず。東洋諸國はこの勢の去ると共に、漸く沈靜し、支那印度を始めエジプト、アツシリヤ、ペルシヤの如き、皆化石の如き状態に陥りたるなり。而して此の間、世界の陽氣は西洋暗黒の地を攪破し、ギリシヤ時代以來今日に至るまで、所謂西洋の文明を發現せしめたり。然れども陽氣大勢の回轉は間斷なきものにして、永く一處に止まるものに非ず。今は再び東洋の國土を以て、其の爆發點となし來るものの如し。

「世界大勢破裂の中心點」

西漸

我が日本の國土の如きは、東洋西洋を括約する地位を占むれども、古來未だ曾て世界大勢破裂の現場とならざりしは頗る怪しむべきことなり。大勢破裂點は支那印度邊に起發し、ペルシヤを経て西漸し、歐洲諸國を横ぎり大西洋を渡り、米國に達したるなり。もしこの大勢再び其の起發點に歸るべきものとせば、必ずやまづ我が日本の國土を以てその破裂點とせざるべからず。

「日本の地位」

我が日本が西洋諸國民注意の焦點とならんとする豫報は、既に世界に傳播せられたり。日本は遠からずして世界文明の潮流に對し、一大寄與を爲すべき地位にあるは、火を睹るよりも尙明らかなり。然れども、日本は世界の文明に對し、如何なる寄與を爲すべきか。こは、今日我が國民の覺悟に依りて定るべきものにして、寄與すべき事柄の詳細に至つては、今日よりしてこれ

火を睹るより明らか

「斬新な寄與」

を明言し得べからずと雖も、少くとも日本國民の特質上より、一種の斬新なる寄與をなすに至るべきは、過去に於ける各國寄與の模様を見て、明らかにこれを推すことを得るなり。

何をか日本國民の特質といふ。日本國民は世界に對し如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大勢は日本人をして如何なることを世界に宣傳せんとしつゝあるか。大勢は無聲無言なり。識者先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ形あらしめざるべからざる大任を負ふ。もし偉大なる先覺者ありて、此の大勢の言はんと欲して言ふあたはざる所を國民に宣傳するあらんか。國民の心は、譬へばせかれたる水の堰を開かれたる如く、滔々として其の進むべき處に流れ行かん。我輩は一日千秋の思を爲して、日本國民將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でんこ

一日千秋の思
「日本國民の大指導
者は誰か」

とを希望して已む能はざるなり。

然れども、姑く維新時代に立返り、當時の英雄偉人が思惟したる所を見る時は、其の中に我が國民今日の覺悟となしてなほ可なるものあるを發見せずんばならず。維新の俊傑、多くは天下を以て自ら任じたる人なり。彼等は如何なる事を以て日本の抱負とし、如何なることを以て日本の覺悟としたるか。彼等は至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁、天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を説破討伐、勦誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。其の元氣の宏壯なる、轉人をして發奮措く能はざらしむ。此の元氣と此の覺悟とありしが故に、維新の改革は成就せられ、鎖國攘夷の固陋心は打破られたるなり。維新以後日本が駭々として進歩し、今日のごと

權謀術數

勦誅

土芥も嘗ならず

く力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。我輩は日本人には種々なる缺點あるを知る。日本人は尙幾分の修練と困難とを経過せざれば、決して大國民となること能はざるを知るものなり。然れども、世界中に於て大義名分の爲に狂奔し、忠誠の爲に一身を抛つこと土芥も嘗ならず民ありとせば、先づ指を日本人に屈せざるを得ざるべし。至誠の極、或は輕卒の舉動に出で、大事を誤る如き同胞なきにあらずと雖も、身を殺して仁を爲すを覺悟とすること極めて迅速に、死して悔ゆるなきもの、日本人の如きは、世界國民中多くその比を見ざる所なり。日本人は道德義務の爲に熱狂する國民なりといふとも、誰か然らずといふ者あらん。果して然らば、日本が世界の文明に對してなすべき最大の寄與は、道德上の教訓にあらざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私慾

掣肘

天地大道の化身

「日本國民の大覺悟
大抱負」

の汜濫を排除すべき一大任務を有し居るにはあらざるか。日本帝國が開闢以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に養育せられ、君臣父子夫婦兄弟朋友の道正しく、大體より云へば、殆ど理想に近き國家を經營し來りたるは、他日大に世界の腐敗を掃蕩するが爲にあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本が其の特質上より世界文明に對して爲すべき最大寄與にはあらざるか。我輩は、日本が天地大道の化身となりて、萬國民の警醒する大抱負を實現すべき時機の到來せんとするを思ひ、欣喜措く能はざるものあり。

(思潮評論)

訂三
新日本讀本卷六(終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表、昭和六年五月修正)(千八百五十八字)

〔一〕一丁七丈三上下不
 世丙並〔一〕中〔、〕丸主
 〔一〕之久乏乘〔乙〕乙九
 乞也乳亂〔一〕了事〔二〕
 二五五井〔一〕亡交京亭
 亦〔人〕人仁仇今介仕他
 付代令以仰仲伴任伊伏
 伐休伯伴伺似位低住佐
 何余佛作伸使來佳例侍
 供依侮侯侵便係促俱俊
 俗保俠信修俳俵倅舛倉
 個倍倒候借倫假偉偏停
 健側偶傍傑備催働傳債
 傷傾僮像僚僞憎價儀億

儉償優〔九〕元兄充兆兇
 先光克兌免兒〔入〕入內
 全兩〔八〕八公六共兵具
 其典兼〔〇〕冊再〔一〕冗
 〔〇〕冬冷涼准凌凍〔九〕
 凡〔口〕凶出〔刀〕刀双分
 切刊刑列初判別利到制
 刷券刺刻則削前剛副剩
 割創劇劍劑〔力〕力功加
 劣助努効勅勇勉勳勸務
 勝勞募勢勤勳勸勸〔力〕
 包〔匕〕化北〔區〕區〔十〕
 十千升午牛卑卒卓協南
 博〔卜〕占〔尸〕印危却卵

卷卽〔一〕厄厘厚原厥
 〔去〕去參〔又〕及友反叔
 取受〔口〕口古句叫召可
 史右司各合吉同名后吏
 吐向君吟否舍呈吸吹告
 咸周味呼命和咽哀品員
 哲唐唯唱商問啓善喉喜
 喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
 〔口〕囚四回因困固國園
 園圓圖團〔土〕土在地坂
 均坊坑坪垂型埋城城執
 培基堀堂堅堤堪報場塔
 塗塵境墓塀增墨墮壁壇
 壓壤〔士〕士壯壹壽〔又〕

夏〔夕〕夕外多夜夢〔大〕
 大天太夫央失奇奉奏契
 奔奢與奪獎奮〔女〕女奴
 好如妃妊妥妙妨妹妻姉
 始姑姓委姦姪姪姻姻姿威
 娘娛娠娼婚婦婚媒嫁嫡
 嫌壤〔子〕子字存孝季孤
 孫學〔一〕宅守安宏完宗
 官定宜客宜室宮害宴家
 容宿寄密富寒察寢寢實審
 寫寬寶〔寸〕寸寺封射將
 專尉尊諱對導〔小〕小少
 尙〔尤〕就〔尸〕尺尼尾尿
 局居屆屈屋展曆履屬

【山】山岡岩岳岸峰島
峽崇崎崩【川】州州巡巢
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幼幾【平】平
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】式

情感惜惠惡情惱想愁偷
意愚愛感慈慙慕悽慢憤
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】戶
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拈拳拾持指振捕
捧描拾掃授掌排掛探探
控推揚接提換握揮搦揮
援損搖搜擄携摩撫擇擊
操擔據擬攢攝【支】支
【支】收改攻放政故敘教
敏救敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】斤

斤斤斬新斷斯【方】方施
旋族族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆疊曜【目】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村東柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔杏柅柱柳栗校
株根格栽桃棠桐桑梅條
梨棗檠構概檠樓標樞模
業極榮構概檠樓標樞模
樣樹橋橫檠檢櫻欄權
【欠】欠欲款欺歌歎歎歎

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【爻】段
殺殿毀【母】母每毒【比】比
比【毛】毛【氏】氏民【气】气
氣【水】水水永汴求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漠漢
漫漸潔滑湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【瓜】瓜
瓜爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】牛
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狎狎猛猫猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理翠環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畝畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【登】登
發【白】白百的皆皇【皮】皮
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
盥盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】示
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窈窕窗窳【立】立章童
端鏡【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】糸
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絕絡給統絲絹經綠維
網網綴綻綿緊緒線縞綠

編綏緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭線繼續
【缶】缺【罽】罽置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耒耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】聿聿
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膾臆膺臆【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【舟】舟與興舉舊【舌】舌舍
【舟】舟與興舉舊【舌】舌舍
【舟】舟與興舉舊【舌】舌舍
船艦【艮】艮良【色】色艸
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊茵菓菜華
萬落葉著葬蒙蒸著蔓薄
藏藝藤藥【虎】虎虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衝衝衛【衣】衣表裘袋
袖被裁裂裏裕補裝襟製
複褒襲【西】西要覆【見】見
見規視親覽覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論諭諸諾謀調諧講謝
論謹謬證識譜警譯讓讓
譽讚變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
 貞負財貧貨販貫責貯貳
 貴買貨費買賀貨賄資賤
 賓賜賞賢賣賤賦質賴購
 贈賞【赤】赤【走】走赴起
 超越趣【足】足距跡路踊
 躍【身】身【車】車軌軍軒
 軟軸較載輕輦輪輯輸輿
 轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
 農【走】込迎近返迫迭述
 迷追迭迭逃逆透逐途通
 速造連週進逸遇遊運
 過道達達遙遞遠遭適遭
 遲遲選選避還邊邊【邑】
 邦邪邸郊郡部郵都鄉
 【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
 醜醫【采】釋【里】里重野
 量【金】金釜針鈞鈍鉛鉛
 鉢銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄
 錢鍋鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鑛
 【長】長【門】門閉開閑
 閑閑關【阜】防附降限陞
 院陣除陪陳陰陵陶陷陞
 陽隆隊階隔隙際障隣隨
 險隱【隹】隻雀雄雅集屜
 雌雙雜離難【雨】雨雪雲
 零雷電雷震霜霧露靈
 【青】青靜【非】非【面】面
 【革】革靴【音】音響【頁】
 頂項順頰預頰頰頰頰頰
 額額頰頰頰頰頰頰頰頰
 【飛】飛翮【食】食飢飲飯
 飾養餓餘餅餠餐【首】首
 【香】香【馬】馬馳駁駮駮
 騎騰駮駮駮駮駮駮駮駮
 髓體【高】高【髟】髮【門】
 闕【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
 鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
 【齒】嚙【鹿】鹿麗【麥】麥
 【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
 點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
 齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た
 だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞
 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと

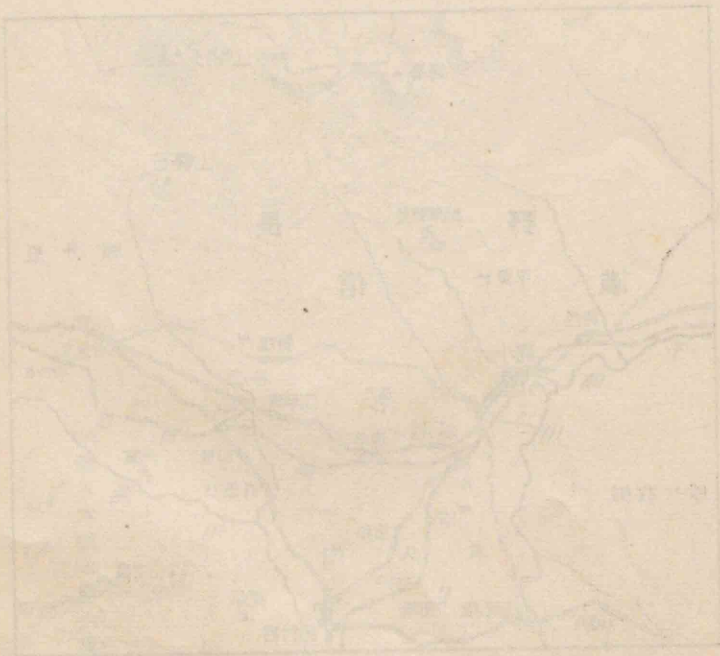
略字表

左の字體を本位として用ひること。
 (括弧内の小字は字典體)

勸(勸)	權(權)	灌(灌)	歡(歡)	觀(觀)	舉(舉)	譽(譽)	斷(斷)	繼(繼)
沢(澤)	扶(擇)	訳(譯)	吠(驛)	釈(釋)	齒(齒)	齡(齡)	濕(濕)	頭(頭)
交(變)	恋(戀)	蛩(蠶)	湾(灣)		窓(窗)	総(總)	属(屬)	嘔(嘔)
莖(莖)	徑(徑)	經(經)	輕(輕)		為(爲)	偽(偽)	帶(帶)	滯(滯)
併(併)	塀(塀)	瓶(瓶)	餅(餅)	研(研)	參(參)	慘(慘)	兩(兩)	滿(滿)
齊(齊)	齋(齋)	濟(濟)	劑(劑)		発(發)	廢(廢)	胤(胤)	獵(獵)
残(殘)	淺(淺)	賤(賤)	錢(錢)		乱(亂)	辞(辭)	潜(潛)	賛(賛)
勞(勞)	營(營)	榮(榮)	學(學)	覺(覺)	走(走)	徒(徒)	位(從)	縱(縱)
					惱(惱)	腦(腦)	処(處)	揆(據)
					担(擔)	胆(膽)	来(來)	麦(麥)
					寿(壽)	鑄(鑄)	数(數)	楼(樓)



第十一圖 (地圖) 地圖

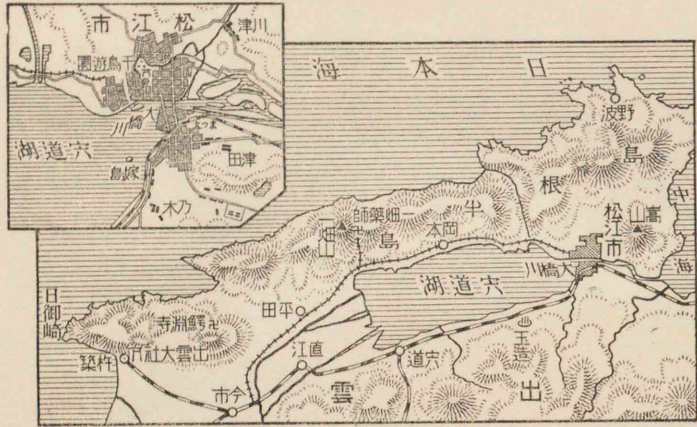


第十二圖 (地圖) 地圖

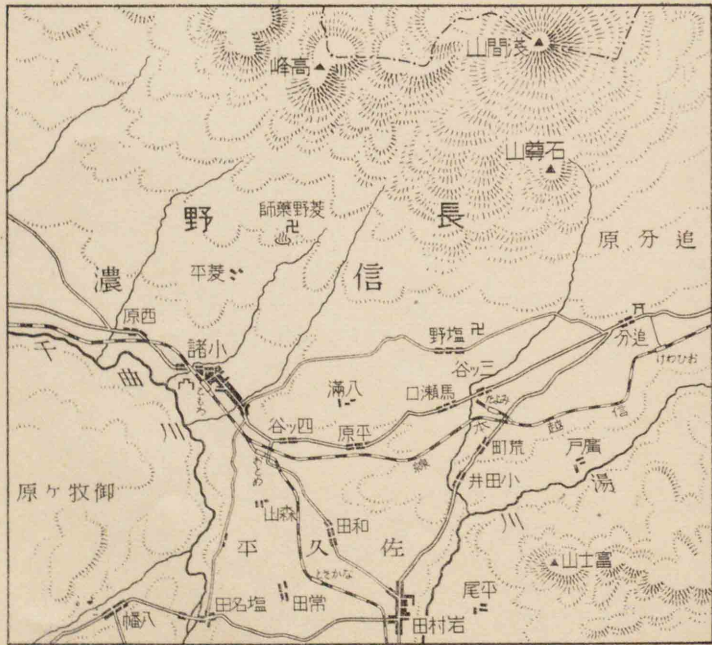
乐(樂)	葉(藥)	讀(讀)	統(續)
竜(龍)	滝(瀧)	随(隨)	髓(髓)
廉(鹿)	獮(麗)	聴(聽)	廳(廳)
虚(虚)	戯(戲)	遅(遲)	解(解)
独(獨)	触(觸)	畳(畳)	撰(撰)
虫(蟲)	蚕(蠶)	仮(假)	兒(兒)
励(勵)	嘗(嘗)	国(國)	圀(圍)
口(圓)	凶(圖)	壹(壹)	実(實)
写(寫)	宝(寶)	扣(控)	叙(敘)
糸(條)	様(樣)	帰(歸)	气(氣)
炉(爐)	犧(犧)	献(獻)	画(畫)

略字表 終

苗(畱)	尽(盡)	礼(禮)	称(稱)
糸(絲)	欠(缺)	声(聲)	台(臺)
旧(舊)	万(萬)	号(號)	証(證)
豊(豊)	弁(辨)	逶(遞)	辺(邊)
医(醫)	鉄(鐵)	関(關)	双(雙)
霊(靈)	余(餘)	館(館)	体(體)
塩(鹽)	点(點)	覚(覺)	
鬪(鬪)	刺(刺)	龟(龜)	



照參(都首の國神)課一十第



照參(歌の情旅川曲千)課一十二第

三新日本讀本卷六參考圖

写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(敘) 絃(絃)
 条(條) 樣(樣) 歸(歸) 气(氣) 画(畫)
 炉(爐) 儀(儀) 獻(獻) 画(畫)

略字表 終

文語動詞活用表

活用種類	語根	活用				形
		未然	連用	終止	連體	
四段	書	カ	キ	ク	ケ	命令
上二段	起	キ	キ	ク	ケ	命令
上二段	兼(着)	キ	キ	ク	ケ	命令
下二段	兼	ネ	ネ	ケ	ケ	命令
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケレ	命令
カ行變格	(來)	コ	キ	ケル	ケレ	命令
サ行變格	(爲)	セ	シ	ケル	ケレ	命令
ナ行變格	死	ナ	ニ	ス	スレ	命令
ラ行變格	有	ラ	リ	ル	レ	命令

口語動詞活用表

活用種類	語根	活用				形
		未然	連用	終止	連體	
四段	書	カ	キ	ク	ケ	命令
上二段	起	キ	キ	ク	ケ	命令
上二段	兼(着)	キ	キ	ク	ケ	命令
下二段	兼	ネ	ネ	ケ	ケ	命令
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケレ	命令
カ行變格	(來)	コ	キ	ケル	ケレ	命令
サ行變格	(爲)	セ	シ	ケル	ケレ	命令

文語形容詞活用表

活用種類	語根	活用			形
		未然	連用	終止	
清	涼	ク	ク	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ

口語形容詞活用表

活用種類	語根	活用			形
		未然	連用	終止	
清	涼	ク	ク	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ
シク	シク	シ	シ	シ	シ

文語助動詞活用表

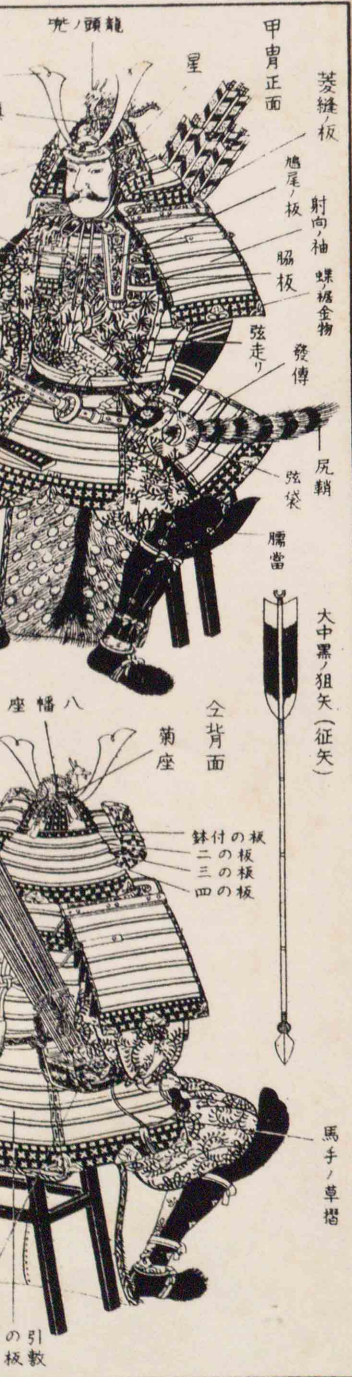
助動詞種類	語	活用				形
		未然	連用	終止	連體	
の	る	レ	ル	ル	ル	命令
可	ら	レ	ル	ル	ル	命令
受	ら	レ	ル	ル	ル	命令
使役	せ	セ	セ	ス	ス	命令
敬	む	ム	ム	ム	ム	命令
時	り	リ	リ	リ	リ	命令
指	た	タ	タ	タ	タ	命令
否	べ	ベ	ベ	ベ	ベ	命令

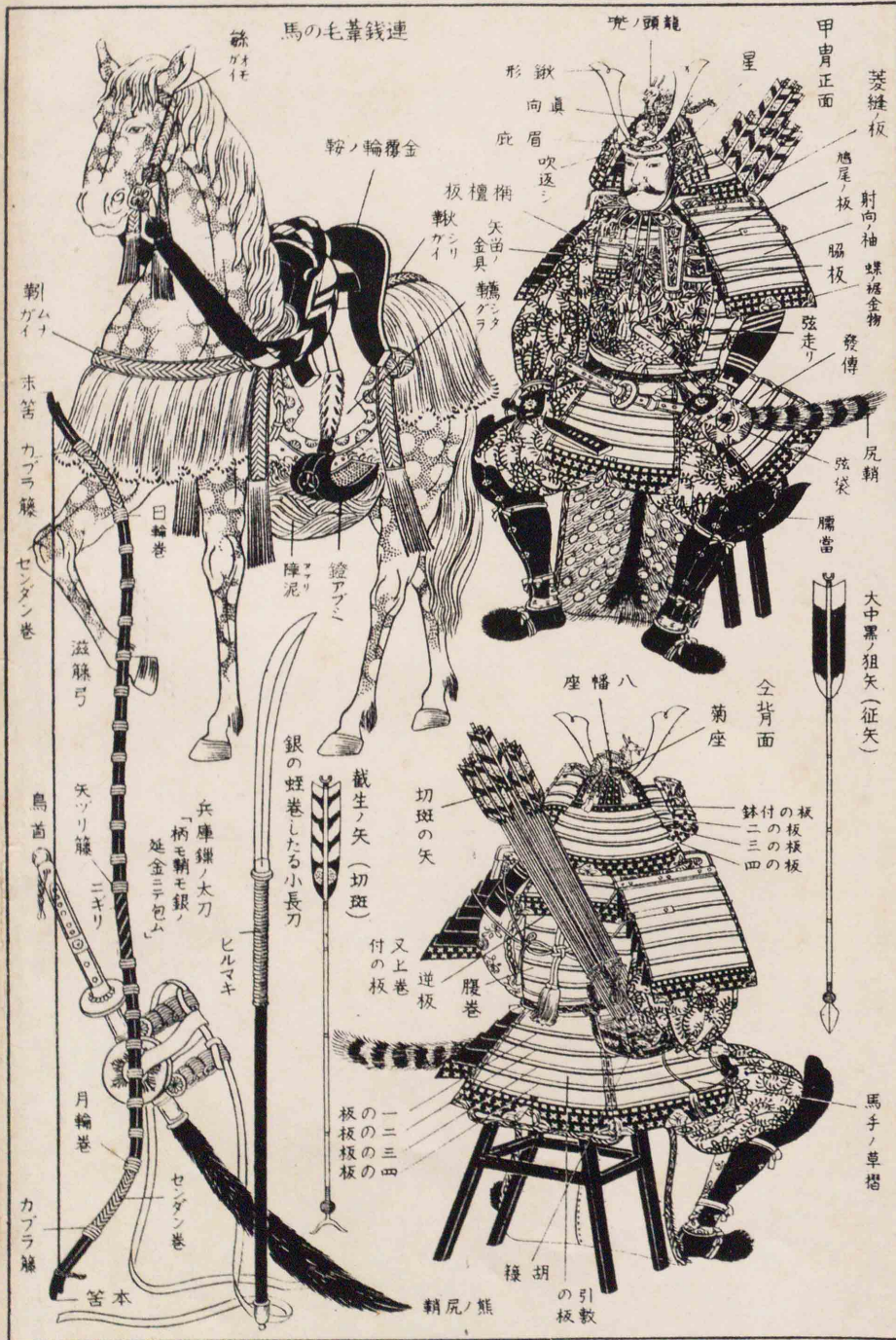
動詞

音便	表
一 い音便	書き 防ぎ
二 う音便	言ひ 言ひ
三 撥音便	死に 死に
四 促音便	破り 破り

形容詞

助動詞種類	語	活用	形
の	る	レ	ル
可	ら	レ	ル
受	ら	レ	ル
使役	せ	セ	ス
敬	む	ム	ム
時	り	リ	リ
指	た	タ	タ
否	べ	ベ	ベ





文部省檢定濟

用科文漢語國校學中 日八十二月一十年六和昭
 用科語國校學業實 日六月七年八和昭

大正十四年十月十日印
 大正十五年一月三日訂正再版印刷
 大正十五年七月二日訂正三版印刷
 昭和三年十一月一日訂正四版印刷
 昭和六年七月廿八日訂正五版印刷
 大正十四年十月廿七日發
 大正十五年一月五日訂正再版發行
 昭和三年七月廿三日訂正三版發行
 昭和三年十一月五日訂正四版發行
 昭和六年七月廿五日訂正五版發行
 昭和六年十一月十七日訂正六版印刷
 昭和六年十一月二十日訂正六版發行



發
 兌

振替口座東京二六四四番
 振替口座大阪四七一番

編者

京都市左京區修學院西沮澤町四

吉澤義則

印發行兼者

東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

鈴木政雄

發行者

大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

鈴木常松

東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

修文館

大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

訂三	新	日	本	讀	本
價	定	卷一六	各	金六	十錢
卷七	十	各	金五	十五錢	

